

ディオドロス・シクロロス『歴史叢書』第一七卷  
「アレクサンドロス大王の歴史」訳および註（その二）

森谷公俊

はじめに

本稿は、前一世紀シチリア出身のギリシア人歴史家ディオドロスの『歴史叢書』(Bibliothekē Historikē) から、アレクサンドロス大王の治世を記述した第一七巻を翻訳し、歴史学的註釈を付けたものである。三回目にあたる今回は、第六四く八三章、ガウガメラの会戦後からダレイオス三世の殺害者ベッソスの処刑までを扱う。

翻訳の底本に使用したのは、次のトイブナー版テキストである。

・ C.Th.Fisher(ed.), *Diodori Bibliotheca Historica* vol.IV (Bibliotheca Teubneriana), Stuttgart, 1994.  
訳註の作成において依拠したのは、ビュデ叢書およびロエブ古典文庫所収の次の二冊である。

・ P.Goukowsky, *Diodore de Sicile, Bibliothèque Historique Libre XVII* (Collection Budé), Paris, 1976.

・ C.B.Welles, *Diodorus of Sicily*, vol. VIII (Loeb Classical Library), London and Cambridge, 1970.

ディオドロスを除く四編の大王伝は、次のように作者名のみで示す。それぞれの邦訳と合わせて列挙する。

・ アリアノス・アッリアノス『アレクサンドロス大王東征記 付インド誌(上・下)』(大牟田章訳) 岩波文庫、二〇〇一年

・ プルタルコス・プルタルコス『アレクサンドロス』(井上一訳)『プルタルコス英雄伝(中)』(村川堅太郎編)ちくま学芸文庫、一九九六年所収

・ ユステイヌス・ポンペイウス・トログス／ユニアヌス・ユステイヌス抄録『地中海世界史』(合阪學訳) 京都大学学術出版会、一九九八年(第一〜二巻がアレクサンドロスの治世)

・ クルティウス・クルティウス・ルルス『アレクサンドロス大王伝』(谷栄一郎／上村健二訳) 京都大学学術出版会、二〇〇三年

訳註における文献の略記は次の通りである。

・ Bosworth = A.B.Bosworth, *A Historical Commentary on Arrian's History of Alexander*, Volume I, Oxford, 1980.

・ Atkinson = J.E. Atkinson, *A Commentary on Q.Curtius Rufus' Historiae Alexandri Magni Books 5 to 7*, 2, Amsterdam, 1994.

- ・ Speck = H. Speck, 'Alexander at the Persian Gates,' *American Journal of Ancient History*, New Series 1, 2002.
- ・ 大牟田訳註「フラウイオス・アツリアノス『アレクサンドロス東征記およびインド誌』註釈編（大牟田章 訳・註）、東海大学出版会、一九九六年
- ・ 森谷『王宮炎上』＝森谷公俊『王宮炎上——アレクサンドロス大王とペルセポリス』吉川弘文館、二〇〇〇年
- ・ 森谷『虚像と実像』＝森谷公俊『アレクサンドロス大王——「世界征服者」の虚像と実像』講談社選書メチエ、二〇〇〇年
- ・ 森谷『征服と神話』＝森谷公俊「アレクサンドロスの征服と神話」（興亡の世界史 01）講談社、二〇〇七年

本文中の「」内は、訳者の補いである。

## 本文目次

- バビロンとスーサの占領（第六四く六六章）
- ウクシオイ人の制圧（第六七章）
- ペルシア門の突破（第六八章）
- ペルセポリスの占領と略奪（第六九く七一章）
- 王宮への放火（第七二章）
- ダレイオス三世の最期（第七三章）
- ベッソスの反抗・遠征軍の再編（第七四章）
- ヒュルカニア地方の制圧（第七五く七六章）
- アマゾン女王の来訪・東方様式の採用（第七七章）
- サテイバルザネスの離反（第七八章）
- フィロータス事件（第七九く八〇章）
- アフガニスタン侵攻（第八一く八二章）
- サテイバルザネスの最期・ベッソスの捕縛と処刑（第八三章）

**第六章** 一ダレイオスはアルベラの会戦で敗れた後、東方諸属州に向けて逃走した。アレクサンドロスとの間に距離を置き、休息と軍勢の準備のために十分な時間をとろうと欲したのである。まずメディア地方のエクパタナに着くと、無事に生還した者たちを集め、武器を失った者には再武装させた。二近隣の諸民族からも兵士を集し、バクトリアおよび東方諸属州からの総督たちや將軍たちに使いを送って、自分に対する忠誠を維持するよう求めた。

三アレクサンドロスは勝利の後、戦死者を埋葬してからアルベラに入り、大量の食料と少なからぬ夷狄風の装身具や財宝、三〇〇〇タラントンに及ぶ銀を見出した。しかし夥しい死体のために周囲の空気が腐敗するだろうと判断し、直ちに陣を引き払い、全軍を率いてバビロンへ到着した。四住民たちは進んで彼を受け入れ、宿泊先でもマケドニア人を盛大にもてなした。こうして軍勢はこれまでの苦勞を洗い流して英気を養うことができ、食料が豊富なのと住民の歓待のおかげで、三〇日以上もこの都市に滞在した。

五この後彼はピュドナ人のアガトンに城砦の守備を委ね、彼にマケドニア人兵士七〇〇を与えた。またアンピポリス出身のアポドロロスとペラ出身のメネスを、バビロニアおよびキリアまでの諸属州の將軍に任命し、彼らに一〇〇〇タラントンの銀を与えて、できるだけ多くの兵士を集めるよう命じた。六サルデイスの城砦を明け渡したミトレネスにはアルメニアを与えた。接収した資金から、褒賞としてマケドニア人騎兵の各々に六ムナ、同盟軍「の騎兵」に五ムナ、マケドニア人歩兵に二ムナを与え、傭兵の全員には二カ月分の報酬を与えた。

**第六章** 一王がバビロンを発つて行進する途中、アンティパトロスによって派遣された増援部隊が彼のもとに到着した。それはマケドニア人の騎兵五〇〇と歩兵六〇〇〇、トラキア人騎兵六〇〇、トラレス人三五〇〇、ペ

ロポネソスから四〇〇〇の騎兵と一〇〇〇に少し足りない数の歩兵であった。またマケドニアからは王の朋友の息子たちが五〇人、護衛兵を勤めるべく父親によって送られてきた。二王は彼らを受け入れて進軍を続け、六日目にシッタケネ行政区に到着した。

この地方はあらゆる物資が非常に豊富だったので、彼はこの地にかなりの日数滞在した。それまでの長い行軍の疲れから軍勢を休息させたいと思つたし、また部隊の編成を点検し一部の將校を昇進させて、指揮官の数と能力の面で軍を強化しようと考えたのである。三彼は決断したことを実行に移した。將校たちの功績を細心の注意を払つて評定し、多くの者たちをそれまでの位からもつと責任ある地位へと昇進させ、すべての指揮官の威信を高めるとともに、彼に対する情愛の絆をより強いものとした。四彼はまた兵士たちそれぞれの状態にも気を配り、有益なことを数多く工夫して、部隊の強化のために改善をはかった。こうして彼は全軍を、指揮官へのこの上ない献身、命令への服従、さらには武勇における卓越へと導いてから、来たるべき戦闘に向けて進発した。

五スシアナ地方に到着すると、戦闘を交えることなくスーサの名高い王宮を接収した。総督のアプレテスがすんで彼に都市を譲渡したのである。ある者たちが述べるところでは、これはダレイオスが彼の最も信頼する部下たちに命じたのだという。ペルシア王がそのようなことを行ったのは、アレクサンドロスは目の眩むような気晴らしとか、最も輝かしい諸都市や莫大な財宝の獲得に我を忘れるであろうから、その間にダレイオスは逃走しながら戦争準備の時間稼ぎができると考えたからだというのだ。

**第六章** 一アレクサンドロスは都市と王宮の財宝を獲得し、四万タラントンを越える鑄造されていない金と銀を見出した。二これらは長年にわたつて歴代の王たちが運命の思いがけない急変に備え、最後の抛り所として手

付かずで保持してきたのである。このほかに、ダレイオスの標章をもつ金貨が九〇〇〇タラントンあった。

三これらの財宝を手に入れた時、ある奇妙な出来事が王の身に起きた。彼が玉座についたところ、それは彼の体の寸法より大きかった。王の足が玉座の足台に遠く届かないのを見て、近習の一人がダレイオスのテールを持って来て、宙ぶらりんになった足の下に置いた。四それがぴたりだったので、王は機転の利いた彼の奉仕に満足した。ところが玉座の傍に立っていた者たちの中で、一人の宦官が運命の変転に心をかき乱され、涙を流した。五アレクサンドロスはこれを見て尋ねた。「どんな不幸が起きたのを見て泣いているのか」。宦官は答えた。「私は今あなた様の奴隷ですが、以前はダレイオス様の奴隷でした。私は生まれながらにして主君を愛する者です、かのお方が最も大切にしておられた物が今では何の価値もない道具になってしまったのを見て、心が痛むのです」。

六王はこの返答を聞いて、ペルシア王国が根底から覆されたことを思い起こし、自分の振舞いが傲慢で、捕虜に対する日頃の寛大さからほど遠いものであると思った。七そこで彼はテールを置いた近習を呼び、それを元に戻すよう命じた。すると傍にいたフィロタスが言った。「それは傲慢ではありません。それはあなたの命令によるのでなく、何か良き神霊の深慮と計らいによるものです」。王はこの言葉を何かの予言と受け止め、テールは玉座の下に置いたままにするよう命じた。

第六七章 一このあとダレイオスの母と娘たちと息子をスーサに残し、ギリシア語の教師を彼らのそばに置いた。彼自身は軍と共に進発し、四日目に「パシ」ティグリス川に着いた。二この川はウクシオイの山脈に発し、始めは深い峡谷に挟えられた険しい山地を一〇〇〇スタディオン「一八〇キロ」通過して、それから平坦な土地をしい

に穏やかになりつつ流れ、六〇〇〇スタディオン「二〇八〇キロ」進んでペルシア海に注ぐ。三この「パシ」ティグリス川を渡ってウクシオイ人の土地を進軍したが、ここは肥沃で多くの川が流れ、沢山の多種多様な果実を産した。熟した果実が乾くと、「パシ」ティグリス川を行き交う商人たちは、食卓を彩るにふさわしいあらゆる種類の甘味を持ってバビロニアへ下ってくるのである。

**四**アレクサンドロスは、ダレイオスの親族であるマデテスが相当規模の兵力をもって隘路を守っているのを見出し、その地点の極めて堅固なことを見て取った。周囲も断崖絶壁で越えるのは不可能だったが、ウクシオイ人でその土地に精通した一人の男が、とある狭く危険な抜け道を通って兵士を案内し、敵より高い場所を取らせようと彼に申し出た。**五**アレクサンドロスはこの提案を受け入れ、十分な数の兵士をこの者につけて送り出し、彼自身は可能なかぎり道を切り開いて、隘路に陣取る敵に連続攻撃をしかけた。戦闘は激烈なものとなり、バルバロイがこの攻防に気を取られているうちに、先に派遣された部隊が思いがけず隘路の守備兵よりも高い場所に現われた。バルバロイは驚愕してたちまち逃走したので、アレクサンドロスはその隘路を制圧し、直ちにウクシオイ地方のすべての都市を獲得した。

**第六章** 一そこから進発してペルシス地方へ進み、五日目にスシア門と呼ばれる岩場に到達した。そこは既にアリオバルザネスが、二万五〇〇〇の歩兵と三〇〇の騎兵を率いて占領していた。二王は武力でこの関門を奪い取ろうと考えて、狭く険しい隘路を何者にも妨げられずに進んだ。夷狄軍は彼が隘路を通過するのがある地点までは許しておき、彼が峠道の中ほどに達した時、突如として攻撃を開始した。大きな石を大量に転がり落とすと、それはびっしりと隊伍を組んだマケドニア人の頭上に不意に落下して多くの者を斃し、少なからぬペルシア兵が



崖の上から密集部隊めがけて投槍を放つと、ことごとく命中した。別の者たちは至近距離から石を投げ、強行突破をはかるマケドニア兵を撃退した。彼らは峻険な地形にものを言わせて圧倒的な優位に立ち、多数を殺し、少なからぬ者に重傷を負わせた。

三アレクサンドロスはこれほどの災難を被りながら助けることもできず、また敵は一兵たりとも殺されず全くの無傷なのに、味方は多くが斃れ、ほとんど全員が負傷したのを見て、ラッパの合図で攻撃部隊の兵士を戦闘から呼び戻した。四関門から三〇〇スタディオンの「五四キロ」退却して陣を張り、付近の住民から別の間道がないかどうかを知ろうとした。誰もが異句同音に、別の抜け道は一つも無く、迂回するには何日もかかると言った。彼は戦死者を埋葬せずに放置するのは不名誉だと思ったが、かといって遺体の引渡しを求めるのは敗北を認めたことになるので恥ずべきことだと考えて、捕虜を全員連れてくるよう命じた。五彼らの中で、ペルシア語を知っているバイリンガルの男が連れてこられた。

彼によると、自分はリュキア人だが捕虜になり、長年この辺りの山で羊飼いをしてきた、そのためこの地方には精通しており、樹木に覆われた道を通って軍を案内し、関門の守備隊の背後に連れて行くことができるという。六王はこの男に多大な褒美をとらせると約束し、彼を道案内にして、厚い雪を踏みしめ、深い渓谷と多数の裂け目に分たれた峻険な土地を通り抜け、さんざん苦勞しながら夜間に山を踏破した。七こうして敵の前哨部隊の前に姿を現すと、第一列を斬り倒し、二列目に配置された守備隊は生け捕りにし、第三列を敗走させ、関門を制圧してアリオバルザネス麾下の兵士の大半を殺した。

## 第六十九章

一このあとペルセポリスに向かって進んだが、道中で、この都市の統治者であるティリダテスからの

手紙を受け取った。そこにはこう書かれていた。もしアレクサンドロスが、ペルセポリスをダレイオスのために守り抜こうと企てている者たちに先んじて到着すれば、自分が都市を明け渡すので、彼がその支配者となるであろう、と。二そこでアレクサンドロスは強行軍で道を急ぎ、アラクセス川に架橋して兵士を対岸に渡した。進軍の途中、王は思いもよらぬ恐ろしい光景に遭遇した。それはそうした悪事を行った者への憎しみの念をかき立て、また癒しがたい災難を被った人々への憐憫と同情を呼び起こした。三というのは、かつてペルシア王たちによって故国から連れ去られたギリシア人たちが、嘆願者の印であるオリブの小枝を手にして彼に会いに来たのである。その数およそ八〇〇人。大半は年老いて、誰もが体に障害を負わされ、ある者は足を、ある者は耳と鼻を失っていた。四知識や技術を身につけて高い教育を受けた者たちは、仕事に必要な部分だけを残して、それ以外の手足の先端部分を斬られていた。その年齢にふさわしい威厳と体に負わされた災難を目の当たりにして、全将兵が不幸な人々の悲運を憐れんだ。中でもアレクサンドロス自身が不運な人々の境涯に心を揺さぶられ、涙を抑えることができなかった。

五彼らは皆声の一つにして叫び、自分たちの災難に手を差し伸べてほしいとアレクサンドロスに嘆願した。そこで王はリーダーたちを呼び寄せ、自身の度量の大きさにふさわしく敬意を払い、故郷への帰国についても最大限の配慮を尽くすことを約束した。六しかし彼らは集まって協議した結果、故郷に帰るよりその場に留まることを選んだ。なぜなら、無事に帰国できても皆がばらばらになり、自分の都市で生きる限りは運命から受けた傷痕を背負って生き恥をさらすだけ。これに対し、同じ災難に遭った者として一緒に生きていけば、仲間たちの同じような不幸を自分の不幸の慰めとすることができるからだ。七そこで彼らは再び王に面会して自分たちの決定を

伝え、この計画にふさわしい援助を与えてくれるよう求めた。八アレクサンドロスはこの決定に同意し、各人に三〇〇ドラクマと、男性用の衣服五枚、それに同数の女性用衣服、二組の牛、五〇頭の小家畜、五〇メデイムノスの小麦を贈った。さらに王国の租税をすべて免除し、何人なんびとからも不正を受けることのないよう配慮することを行政官たちに命じた。九こうしてアレクサンドロスは自身の寛大な本性に従い、このような恩恵でもって不運な人々の災難への償いとしたのである。

**第七〇章** 一ペルシア帝国の首都であるペルセポリスを、彼はアジアの諸都市の中で敵の最たるものだと言って指し示し、王宮を除いて兵士たちに略奪の餌食として与えた。二ペルセポリスは太陽の下では最も裕福な都市で、個人の邸宅には長年にわたってあらゆる種類の財宝が充ちていた。マケドニア人はそこに押し入って人々を皆殺しにし、財宝を奪い取ったが、その多くは一般住民のもので、あらゆる種類の家具調度品と装飾品で一杯だった。三それから大量の銀が持ち去られ、少なからぬ金も略奪された。また非常に高価な衣装もたくさんあり、あるものは貝紫で染色され、あるものは金の縫い取りで入念な刺繍が施されていたが、それらも征服者の褒美になってしまった。全世界にその名を謳われた壮麗な宮殿は、凌辱とまったき破壊の犠牲に供されたのである。

四マケドニア人は日がな一日略奪に耽つたが、それでも飽くことを知らぬ欲望を満たすことはできなかった。五略奪を求めてやまぬ貪欲ぶりは度を越していたので、彼らは互いに争って、大量の略奪品を手に入れた者の多くを殺してしまうほどだった。ある者たちは、見つけた中で一番高価な品を槍で突き刺してから自分の分け前を運び去った。分け前をめぐって争い、横取りした者の手を怒りに逆上して斬り落としてしまったのも幾人かいた。六女たちは、装飾品を身につけたまま力づくで引張って行き、捕虜として奴隷に仕立てた。

こうしてペルセポリスはその繁栄において他の諸都市を凌駕していただけ、その災難においても他をはるかに上回ったのである。

**第七章** 一アレクサンドロスは城砦に上り、そこにある財宝を接收した。それはペルシア人最初の王であるキユロス「二世」の時代から当時に至るまで、国家収入から蓄積されてきたもので、金と銀に満ち溢れていた。そこには金を銀に換算して一二万タラントンあることがわかった。二彼はこれらの資金の一部を戦争に用いるため自分で携行し、他はスーサに移してこの都市に保管したいと思った。そこでバビロンとメソポタミア、さらにスーサからも大量の荷駄用と荷車用の騾馬、それに加えて三〇〇〇頭の荷駄用駱駝を送らせ、これらの駄獣を使ってすべての財宝をあらかじめ決めた場所へ輸送した。三彼は住民に対しては強い憎しみを抱き、彼らを信用せず、遂にはペルセポリスを完全に破壊することを欲した。

その建造物の豪華さゆえに、ペルセポリスの王宮について手短かに語るのには不適切ではないと思う。四城砦は広大で、三層の城壁がそれを取り巻いている。第一の城壁は入念な造りの基壇の上に建てられ、高さは一六ペーキユス「約七メートル」、塔の形をした狭間胸壁を備えている。五第二の城壁は第一と同じ造りで、高さは二倍あった。第三の城壁は外形が方形で、壁の高さは六〇ペーキユス「約二七メートル」、永久に長持ちするよう特別に作られた堅固な石で建ててある。六四面の各々に青銅製の門があり、その傍には高さ二〇ペーキユス「約九メートル」の青銅の柱がある。それは見る人を驚かせるためだったが、門は安全のためである。

七城砦の東には、四プレトロン「約一二〇メートル」離れて「王の丘」と呼ばれる山があり、その中に歴代の王の墓がある。岩が削り抜かれて真ん中にたくさんの墓室があり、その中に死者の遺体が安置される。そこに近づ

く方法はなく、ある装置で死者を吊り上げて埋葬がなされるのである。八城砦のいたるところに豪華な装飾を施した王族や將軍たちの住居があり、また財宝を守るのにふさわしく建造された宝蔵がある。

**第七章** 一アレクサンドロスは勝利の祝典をとり行い、神々に盛大な犠牲を捧げ、朋友たちと豪華な饗宴を催した。この日朋友たちは歡樂の限りを尽くして痛飲し、酔いが回るにつれて酔客たちの魂は狂気に取りつかれたようにすっかり逆上<sup>のぼ</sup>せあがった。二この時、同席していた遊女の一人でタイスというアテネ生まれの女がこう言った。もしもアレクサンドロス様が私たちと一緒に行列を組んで宮殿に火を放ち、私たちの手でペルシア人の榮華を一瞬のうちに消してしまつたら、王様がアジアで成し遂げた偉業の中で最高のものになるでしょう。三この言葉が、まだ若くしかも酒で理性を失つた者たちに向つて言われたので、当然のことながら、誰かが行列を作つて松明に火をつけると叫び、ギリシア人の聖域に対する冒瀆行為に復讐せよと呼びかけた。四他の者たちも喝采してこれに唱和し、そうした振舞いはアレクサンドロスだけにふさわしいと言つた。王もこうした言葉に煽り立てられたので、全員が宴席から立ち上がり、ディオニュソスを称えて勝利の行列を組もうではないかと口々に言い合つた。

五たちまち沢山の松明が集められ、女性歌手たちも酒宴に招待されていたので、歌声や横笛、縦笛の音に合わせて王がみずから行列の先頭に立ち、遊女タイスがこの余興を先導した。六王に次いで最初に彼女が火のついた松明を宮殿に投げ入れた。他の者たちもこれになつたので、王宮一帯はたちまち巨大な炎に包まれて燃え落ちてしまつた。何よりも意外だつたのは、かつてペルシア王クセルクセスがアテネのアクロポリスに対して行つた神聖冒瀆を、不正を被つた国の一女性が、はるか後年にほんの戯れで同じ仕打ちでもつて償わせたということだ。

**第七章** 一以上の事が終ると、アレクサンドロスはペルシス地方の諸都市にやって来て、あるものは武力で制圧し、あるものは自身の寛大な扱いによって味方につけてから、ダレイオス目指して進発した。二ダレイオスはバクトリアなど東方諸属州から軍を集めるつもりであったが、急迫を受けて、ペルシア人三万とギリシア人傭兵と共にバクトリアへ向けて逃走した。しかし退却の途中、バクトリア総督のベッソスによって捕えられ殺害された。三彼が殺されたちよūdごその時、騎兵と共に追跡してきたアレクサンドロスはダレイオスが死んでいるのを発見し、彼を王として埋葬した。四ある者たちが書くところでは、発見された時にダレイオスはまだ息があり、アレクサンドロスは彼の不幸に同情した。そしてダレイオスから「自身の」殺害の復讐をするよう求められ、それを約束してベッソスを追ったという。しかしベッソスははるかに先行してバクトリアへと去っていったので、アレクサンドロスは敵の追撃を断念して引き返した。

以上がアジアの情勢である。

**五**ヨーロッパでは、ラケダイモン「スバルタ」人が先の大会戦で敗北を喫し、その惨禍のためにアンティパトロスのもとへ使節を送ることを余儀なくされた。しかし彼は返答をギリシア同盟の評議会に委ねた。そこで評議員たちがコリントスに参集し、各々の立場で延々と議論を交わしたあげく、決定を保留してアレクサンドロスに判断を委ねることを決議した。六このためアンティパトロスはスバルタ市民で最も著名な五〇人を人質に取り、一方ラケダイモン人はアジアに使節を派遣して、犯した誤りに対する赦しを乞うた。

**第七章** 一この年が過ぎると、アテネではケフィソフォンがアルコンとなり、ローマではガイウス・ウァレリウスとマルクス・クラウディウスがコンスルに任命された「前三二九／八年」。この年ベッソスは、ダレイオスの

死後、ナバルザネスやバルクサエンテス、その他多くの者たちと共にアレクサンドロスの手を逃れ、バクトリアへたどり着いた。彼はダレイオスによってその総督に任命されており、その統治のゆえに大衆によく知られていたもので、自由のために立ち上がるよう彼らに呼びかけた。二彼は、この地方が「敵には」近づき難く、また独立を得るのに十分な人的資源があるので、この土地が自分たちの大きな拠り所になるだろうと指摘した。そして自分が戦争の指揮をとることを布告し、大衆を説得して自身を王に任命した。それから兵士たちを登録し、大量の武器を準備し、その他緊急に必要なことに精力的に取り組んだ。

三アレクサンドロスは、マケドニア人たちがダレイオスの死で遠征は終わったと思い、故国へ帰りがついているのを見て、彼らを兵員会に招集し、その場にふさわしい言葉でもって激励し、残された遠征について来るよう彼の士気を高めた。しかしギリシア諸都市から来た同盟軍については彼らを集め、その功績を称えた上で部隊を解散した。その際に褒美として各騎兵には一タラント、歩兵には一〇ムナを与え、その上に未払い分の給与を支払い、さらに故郷へ帰るまでの期間に相当する分「の給与」を付け加えた。四王とともに軍に留まることを選んだ者たちには、各人に三タラントを与えた。これほど多大な褒美で兵士たちに報いてやったのは、彼が生まれながらに気前がいいのと、ダレイオス追跡中に大量の資金を手に入れていたからである。五というのも、彼は王室財務官たちから総額八〇〇タラントを受け取っていたのだ。これとは別に、「マケドニア人」兵士たちに分配されたものが装飾品や盃を含めて一万三〇〇タラントあり、他方「マケドニア人」によって「盗まれたり略奪されたりしたものは、右に述べたよりも大きいと推測されていた。

**第七章** 一アレクサンドロスはヒュルカニアに向けて出発し、三日目にヘカトンタピュロスと呼ばれる都市の

近くに宿営した。これは恵まれた都市で、歡樂にふさわしいあらゆるものが豊富にそろっていたので、数日間そこで軍を休養させた。二それから一五〇スタディオン「二七キロ」進み、大きな岩場の近くに宿営した。岩の根元には奇妙な穴があり、そこからステイポイテスと呼ばれる大きな川が流れ出ていた。川は激流となって三スタディオン「五四〇メートル」流れ、とある胸の形をした岩のあたりで二手に分かれるが、その岩の下には地面が巨大な裂け目をのぞかせていた。川は岩にぶつかって泡立ちながら轟音と共に裂け目になだれ込み、地下を三〇〇スタディオン「五四キロ」流れ、それから再び地表に現われるのである。

三アレクサンドロスは軍を率いてヒュルカニア地方に侵入し、いわゆるカスピ海に至るその地方のすべての都市を服属させた。カスピ海のことを一部の人々はヒュルカニア海と呼んでいる。この海はたくさん大きな蛇や、我々の所とはまったく色の違うあらゆる種類の魚を産すると言われている。四それからヒュルカニアを横断し、「幸福」と呼ばれる村々に到着したが、村々の様子は真実その名の通りであった。というのもその産物において、その土地は他をはるかに凌いでいたからである。五実際、葡萄の木が一本ごとに一メートル「三九リットル」の葡萄酒をもたらし、数本の無花果いちじくの木から一〇メデウムノス「五二〇リットル」の乾燥無花果が採れると言われている。収穫のさいに取りこぼされた小麦が地面に落ちて、蒔かれもしないのに芽を出し、ついには豊かな実りをもたらす。六付近の住民によく知られた樹で、見かけは檜に似た樹があり、その葉から蜜が滴り落ちる。人々はこれを集めて甘味をたつぷり楽しむ。七この地方には羽のある生き物がいてアントレドンと呼ばれ、蜂より小さく表面にまだら模様がある。それは山地に生息し、あらゆる種類の花の蜜を摘み、岩の洞窟や雷に打たれた樹を棲み処として、我々の蜜に少しも引けをとらないとびきり甘い液体を作る。



**第七十六章** 一アレクサンドロスは、ヒュルカニアおよびこの地方に隣接する諸民族を服属させた。またダレイオスと共に逃走していた指揮官たちの多くが自ら投降した。彼は彼らを親切に待遇したので、寛大という大きな名声を獲得した。二実際ダレイオス軍に参加し武勇に優れていたギリシア人約一五〇〇人が、直ちにアレクサンドロスのもとへ投降し許しを乞うたところ、以前と同じ給与で部隊に配属されたのである。三それからアレクサンドロスはヒュルカニアの沿岸地方を進み、マルドイ人と呼ばれる民族の土地に侵入した。彼らは比類ない勇敢さを誇り、王の勢力伸張などは軽蔑して、表敬訪問にも名誉ある扱いにも値しない奴と見なしていた。四それゆえ八〇〇〇の兵で進入路をあらかじめ占拠し、自信に満ちてマケドニア人の接近を待ち受けた。そこで王は彼らを攻撃して一戦を交え、多数を殺し、残りの敵を追って険しい山岳地帯へと入った。

五彼がこの地方を焼き払い、王の馬たちを率いる近習たちが王から少し離れた時、何人かの夷狄が襲ってきて、馬の中で最良の一頭を盗んでいった。六これはコリントス人のデマトスから贈られた馬で、アジアにおけるすべての戦闘で王と共に戦ってきた。馬具を付けていなかった時には調教師しか受けつけなかったが、王の馬具を付けてからは調教師さえ寄せつけず、アレクサンドロスだけにおとなしく従い、彼が乗る時には体をかがめるのであった。七馬の性質が優れていただけに彼は激怒して、この地方の樹木を切り倒すよう命じた。さらに地元の通訳をとおして、もしも馬を返さないならこの地方が完全に焦土となり、住民も皆殺しになるのを見ることになろうと布告した。八この威嚇はたちまち効を奏し、夷狄は恐怖に陥って馬を返し、馬と共に非常に豪華な贈り物も携えてきた。それに加えて五〇人の男たちを遣わし、許しが得られるよう嘆願した。そこでアレクサンドロスは彼らの中で最も立派な者たちを人質とした。

## 第七章

一アレクサンドロスが再びヒュルカニアに戻った時、アマゾン族の女王が彼のもとにやって来た。その名をタレストリスといい、ファシスとテルモドンの間の地方を治めていた。彼女はその美貌と体の強健さで抜きん出ており、同族人の間でもその武勇は称賛の的であった。大部隊の軍勢をヒュルカニア国境に残し、完全武装に身を固めた三〇〇人のアマゾン女性と共に到着したのである。二王は彼女の思いがけない到来と女たちの威厳に満ちた姿に驚き、タレストリスに何の要件で来たのかと尋ねると、彼女は子どもをつくるために来たと答えた。三彼女によれば、彼はその功業によつてすべての男たちの中で最も優れており、自分は精力と勇氣で他の女たちに勝<sup>まさ</sup>っている。それゆえ比類ない二人の両親から生まれる子どもは、その卓越性において他の誰をも凌駕するであろう、というのである。王は喜んでついに彼女の願いを聴き入れ、一三日間にわたつて懇<sup>ねん</sup>ろに過ごした。それから見事な贈り物を与えて故国に歸らせた。

四その後彼はすでに目的を達成し王権も揺るぎないものになったと考えて、ペルシア風の贅沢とアジアの王たちの豪壯な氣風を求め始めた。手始めとして宮廷にアジア人の取次ぎ役を置き、それからアジア人で最も優秀な者たちを護衛兵に任命したが、その中にはダレイオスの兄弟であるオクサトレスも含まれていた。五それから彼はペルシアの王冠をつけ、白い衣装をまとい、ペルシア風の帯やその他、ズボンと長袖上着以外のペルシア風装身具を身に付けた。朋友たちにも紫で縁取りした衣服を分け与え、馬にもペルシア風の馬具を付けさせた。六その上ダレイオスと同様に愛<sup>あい</sup>妾<sup>しやう</sup>たちを侍らせた。その数は一年の日数を下らず、アジア中の女性たちから選ばれただけあつて、その美しさは際立っていた。七彼女たちは毎晩、王が共寝する相手を選ぶために、王の寝台の周りを歩くのだった。しかしアレクサンドロスはこうした習慣は稀にしか用いず、マケドニア人の氣持を損なう

のを恐れて、たいていは以前からの習慣を守った。

**第七八章** 一それでも多くくの者たちが彼に不満を漏らしたが、彼は贈り物によって彼らの機嫌を取った。この時、アレリアの総督サティバルザネスが自分の配下に残されていた「マケドニア人」兵士たちを殺害し、ベッソスと気脈を通じ、彼と共にマケドニア人と戦い抜く決意をしたことを知り、彼に向って出撃した。サティバルザネスはアルタコアナに軍勢を集結させた。これはこの地方で最も名高く、天然の要害としても傑出した都市である。二しかし王が近づくと、彼はその軍の大きさと世に知れ渡ったマケドニア人の武勇に驚愕した。そこで自ら二〇〇〇騎を率いてベッソスのもとへ駆けつけ、緊急の援助を求める一方、他の部隊には……と呼ばれる山に避難するよう命じた。そこは非常に険しく、あえて接近戦の危険を冒そうとしない者には格好の避難所であった。三彼らは命じられた通りにした。王はいつもの功名心を發揮し、険阻で大きな岩<sup>がんき</sup>に逃げ込んだ者たちを包囲して激しく攻めたので、彼らは降伏せざるを得なかった。四その後この属州内のすべての諸都市を三〇日で平定し、アレリアを去つてドラングアナの首都に到着し、そこに滞在して軍を休ませた。

**第七九章** 一この頃、彼自身の良き性格とは無縁の忌むしい事件が降りかかった。王の朋友の一人でデウムノスと名のる者が、あることが原因で王に不平を抱き、怒りにかられて王に対する陰謀を企てたのである。二彼にはニコマコスという愛人がおり、この者を説得して仲間に加えた。ニコマコスはまったく若く、兄弟のケバリノスにこの計画を打ち明けた。ケバリノスは、共謀者の誰かが抜け駆けして王に陰謀を打ち明けはしないかと恐れ、自分で告げようと決心した。

三そこで宮廷に赴いてフィロータスに会い、彼と話して一刻も早くこの件を王の耳に入れるよう求めた。しか

しフィロータスは自ら陰謀に加わっていたためか、それとも怠慢のゆえか、言われた事をまともに取り合わなかった。そしてアレクサンドロスのもとへ行き、多くのあらゆる事柄に関する議論に参加したにもかかわらず、ケバリノスから言われた事は何も伝えなかった。

**四** フィロータスがケバリノスのところへ戻ると、報告するのに適当な機会がなかったと言い、翌日王と二人きりで会う時にこの件をすべて知らせるつもりだと言った。しかし翌日もフィロータスの態度は同じだったので、ケバリノスは、もし別の者からこれが明るみに出たら自分の身が危険になると心配した。それでフィロータスをやり過ぎし、王の近習の一人のもとへ行つて出来事をすべて知らせ、できるだけ早く王に報告するよう依頼した。

**五** 近習はケバリノスを武器庫に連れて行つてそこに匿い、自身は入浴中の王のもとへ行つてこの件を伝え、ケバリノスは自分の元に隠れていると告げた。王は驚き、即座にディムノスを逮捕させ、事の次第を知つてからケバリノスとフィロータスを呼びにやつた。**六** あらゆる調査がなされ、事件が明るみに出た。ディムノスは自ら命を絶つた。フィロータスは自分の怠慢は認めたが、陰謀への関与は否認したので、王はこの件についての決定をマケドニア人に委ねた。

**第八〇章** 一多くの議論がなされた後、マケドニア人はフィロータスと他の被告人に死刑判決を下した。その中には、アレクサンドロスの朋友の第一人者と見なされていたパルメニオンも含まれていた。彼は当時その場になかったにもかかわらず、息子のフィロータスを通じて陰謀に関与したと考えられたのである。**二** それからフィロータスがまず拷問を受けて共犯関係を自白し、マケドニア人の慣習に従つて他の被告たちと共に処刑された。

リユンケステイス出身のアレクサンドロスも同じ運命に遭つた。彼も王に対する陰謀の科で告発されたが、三

年間ずつと監視下に置かれていた。アンテイパトロスとの縁戚関係のゆえに裁判が猶予されていたのである。しかしこの時、彼もマケドニア人の裁きを受けるべく引き出され、弁明の際に一言も発することなく処刑された。

三アレクサンドロスは快速のひとこぶ駱駝で部下を派遣し、フィロータス処罰の報せが伝わる前にフィロータスの父パルメニオンを謀殺した。彼はメディアの統治者に任命され、一八万タラントンに及ぶエクバタナの王室財庫を委ねられていたのである。四それからアレクサンドロスは、マケドニア人の中で彼に批判的な発言をした者や、パルメニオンの死に憤慨した者、さらにはマケドニアへ送った手紙の中で王の利害に反することを家族に宛てて書いた者たちを選び出し、一つの部隊に登録して「無規律部隊」と呼んだ。彼らの不適切な言葉や勝手気ままな物言いによって、残りのマケドニア人が墮落しないようにするためだった。

第八章 一以上の事が終わってドランギアナ地方の処理を済ませると、アレクサンドロスは軍を率いて出発し、以前はアリアスパイ人、今日では「善行者たち」と呼ばれている人々に向ったが、これには以下のような理由があった。メディア人の支配をペルシア人に移したキュロスは、とある遠征で荒涼たる土地に踏み込んでしまい、必需品の欠乏によって極度の困難に陥り、兵士たちは食糧不足のため互いに人肉食を余儀なくされた。その時アリアスパイ人が小麦を満載した三万両の車を運んできたのである。思いがけず救われたキュロスは免税特権とその他の贈り物でこの民族を称え、それまでの名前をやめて「善行者たち」と呼ぶことにしたのだった。二さてこの時アレクサンドロスが彼らの土地に進入すると、住民たちは彼を快く迎えたので、彼もそれにふさわしい贈り物でこの民族を称えた。

すぐ隣のケドロシア人と呼ばれる人々も同様に振舞ったので、彼はそれにふさわしい好意で彼らに報いた。以

上二つの民族の統治をティリダテスに委ねた。三彼がこうしたことに従事していた時、サティバルザネスが騎兵の大軍を率いてアレリアに戻り、住民をアレクサンドロスから離反させたとの報せが届いた。王はこれを聞くとエリギュイオスとスタサノルを指揮官に任命し、軍の一部をサティバルザネスに向けて派遣した。彼自身はアラコシア地方に遠征し、数日でこれを服属させた。

**第八章** 一この年が過ぎると、アテネではエウテクリトスがアルコンになり、ローマではルキウス・プラテイウスとルキウス・パピリウスがコンスル職につき、第一一三回オリンピック競技会が開かれて、マケドニア人のクレイトンがスタディオン競走で優勝した「前三二八／七年」。この年アレクサンドロスはバロバニサダイと呼ばれる人々に対して遠征した。二彼らの土地はずっと北にあり、一面雪に覆われて、あまりの寒さのため他民族が近づくことさえ容易でなかった。土地の大半は平坦で樹木はなく、多くの村々に分かれていた。三家々の屋根は煉瓦をずらして積み重ねたアーチ状になっていた。屋根の真ん中に明り取りの穴が開けられ、そこから煙が吹き出される。建物の全面が閉じられているので、住民は雨風から十分に守られるのである。四雪が深いため、住民は自分の食料を手元に備えた上で、一年の大半を屋内で過ごす。葡萄の木と果樹の周りには土を盛り上げ、冬の間はそのままにして、芽吹く頃に再び土を取り除く。五この地方の景観には緑もなければ耕作の気配もまったくなく。雪と、雪が凍った氷のために、白くきらきらと輝くばかりだ。それゆえ鳥は止まらず、獣も通らない。この土地全体が人を寄せつけず、近づき難いのである。

六それでも王は遠征に立ちはだかるあらゆる障害を物ともせず、マケドニア人の持ち前の豪胆と忍耐を頼みとして、その地勢の困難を克服した。七兵士や随行する非戦闘員の大勢が疲労困憊して取り残された。ある者たち

は雪の輝きとその強烈な照り返しのために視力を失った。八離れた場所からは何もはつきりと見分けられず、煙だけが村々の所在を示すばかりで、マケドニア人が気づいた時にはもう住民たちの間にいることもあった。こうして村々を占領し、兵士たちは大量の戦利品で苦勞の埋め合わせをしたので、王はたちまち住民すべてを支配した。

**第八章** 一このあとコーカサスの近くに進んで宿營した。ある人々はこれをパロパニソス山と呼んでいる。この山脈を一六日かけて横断し、インドに通じる峠に都市を建設して、これをアレクサンドリアと名づけた。コーカサスの中央に、周囲一〇スタディオンの「二八〇〇メートル」、高さ四スタディオンの「七二〇メートル」の岩がある。地元の住民はそこにプロメテウスの洞窟を示し、また神話に語られる鷲の巣と「プロメテウスを繋いだ」鎖の証拠を示した。

二アレクサンドロスは、このアレクサンドリアから一日行程離れた場所に別の諸都市を建設し、バルバロイ七〇〇〇人、従軍してきた非戦闘員三〇〇〇人、それに傭兵の中から希望者をこれらに入植させた。三彼自身は、ベッソスが王冠を戴いて軍を集めていることを聞き、バクトリアへ進軍した。

アレクサンドロスに関する情勢は以上のものであった。

四アレリアに派遣された將軍たちは、反乱軍に遭遇した。彼らは大軍を擁し、戦略の才があり武勇に優れたサティバルザネスを首領としていた。そこで敵の近くに陣を構えた。しばしば小競り合いとなり、しばらくは小規模な戦闘が起こったが、五その後正規戦が行われ、夷狄軍は互角に戦った。反乱軍の將軍サティバルザネスは、両手で頭から兜を脱いで名乗りをあげ、敵の將軍で欲する者あらば一騎打ちを挑めと呼びかけた。六エリギュイ

オスが受けて立ち、英雄的な戦闘が交わされて、エリギュイオスが勝利した。夷狄たちは將軍の死に狼狽し、身の安全を保証されて自ら王に降伏した。

**七** ベッソスは自身を王と宣言し、神々に犠牲を捧げ、友人たちを饗宴に招いた。その宴席で、側近の一人でバゴダロスという名の人物と口論になった。諍いが嵩じるとベッソスは逆上し、バゴダロスを殺そうと企てたが、友人たちのとりなしで思い止まった。**八** 危機を脱したバゴダロスは、夜アレクサンドロスのもとへ逃れてきた。彼が身の安全を保証されたのと、アレクサンドロスから贈られるであろう褒美に誘われて、主だった指揮官たちが共謀してベッソスを捕らえ、アレクサンドロスのもとに連行した。**九** 王は立派な贈り物で彼らに報いてやり、ベッソスの方は処罰のためダレイオスの兄弟と他の親族たちに引き渡した。彼らはある凌辱と虐待を彼に浴びせた上、体を小さく切り刻み槍でばら撒いた。



## 訳註

### 第六四章

一 **アルベラの会戦** デイオドロスは実際の戦場であるガウガメラの地名には一切言及せず、第一七巻の目次においても第六一章三においても戦場をアルベラとしている。プルタルコス(三二・七)とストラボン(一六・一・三、七三八C)によると、ガウガメラは「駱駝の家」という意味の村。現在のテル・ゴメルで、その比定は大牟田訳註一五六六頁。他方アルベラは、ガウガメラから八〇〇九五キロほど離れた町。アリアノス(六・二一・六)は、ガウガメラが一寒村にすぎず名前の響きも良くないので、アルベラの方が大会戦の場所という名声を攫ってしまったのだろうと述べている。ストラボン(前引箇所)も、マケドニア人はアルベラが名高い町であることを知ると、自分たちの勝利がそこで起きたと言いふらしたという。しかし戦場のすり替えは大王の歴史家カリステネスにさかのぼる。ストラボン(一七・二・四三、八一四C)がカリステネスに依拠して述べるには、会戦に先立つエジプト滞在中、ミレトスの使節団がメンフィスにいたアレクサンドロスのもとに数多くの神託を届けたが、その中に「アルベラ周辺で勝利を収めるだろうこと」が含まれていた。カリステネスは大会戦の勝利を著名な町に結びつけ、大王の偉業を賛美・顕彰しようとしたのである。

一 **東方諸属州** 原文は *tas ano satrapeias, ano* は「上方へ」「内陸へ」を意味する副詞で、直訳すれば「上部諸属州」または「内陸諸属州」となる。ペルシアの中心から見た帝国東部を指す用語なので、東方諸属州と訳した。

一 **逃走した** ダレイオスは戦場から一旦アルベラへ逃れ、そこからアルメニアの山地帯を抜けてメディアへ直

行した（アリアノス三・一六・一、クルティウス五・一三〇九）。その経路については大牟田訳註一五八五頁。なお Atkinson, p.136 は、ガウガメラからエクバタナまでの距離を約六六〇キロと見積り、ダレイオスは一月半ばまでにはエクバタナに到着したと推測する。

一 **エクバタナ** 古メディア王国の首都で、古名は Hagmatana 現ハマダン。前五五〇年にキュロス二世が占領し、パサルガダイに次ぐ第二の都とされた。オロンテス山麓の標高一八〇〇メートルの高地にあり、夏は冷涼なので、アケメネス朝からバルティア時代まで夏の宮殿とされた（クルティウス五・八・二）。現在の市街地が古代遺跡の上に作られているため、発掘はごく一部に限られる。ヘロドトス（二・九八）は、前七〇〇年頃にメディアア初代の王となったデイオケスが七重の城壁に囲まれた城を築き、その最奥部に宮殿と宝蔵を建設したと伝える。

一 **無事に生還した者たちを集め** ダレイオスの逃避行に従ったのはバクトリア人騎兵、「王の同朋」および「林檎持ち」と呼ばれるペルシア人精鋭部隊であった。さらにギリシア人傭兵二〇〇〇が途中で合流した（アリアノス三・一六・一〇二）。

一 **東方諸属州からの総督たちや将軍たち** 「からの」の箇所は、トイブナー版では *ἐκ* だが、ロエブ版とビュデ版では *ἐν*。ガウガメラ会戦のために東方諸属州の兵力も総動員されたから、ここに言及された「総督たちや将軍たち」はいずれも会戦終了の時点では地元にはいない。ところが前置詞が *ἐν* の場合、あたかも会戦に参加せず地元に残った総督や将軍がいたかのように誤読される可能性が生じる。それゆえトイブナー版の校訂者は、彼らが東方から参戦した者たちであることを明示するために、出自を表す前置詞 *ἐκ* を採用したのであろう。

三 **アルベラに入り** アレクサンドロスがアルベラに入ったのは会戦の翌日、一〇月二日のこと（アリアノス

三・一五・五)。ダレイオスは休息もとらずに逃走し、彼の捕獲はならなかった。

三 三〇〇〇タラントンに及ぶ銀 クルティウス(五・一・一〇)は王の宝物を四〇〇〇タラントンとしている。

三 空氣が腐敗するだろうと判断し クルティウス(五・一・一一)は実際に疫病が発生したと述べている。両者の記述は古代において、戦場に放置された死体から疫病が蔓延することに言及した唯一の例。ただし死体が放置された場所はガウガメラのはずで、これをアルベラに置き換えたのは明らかな創作である。

三 バビロン 古代メソポタミアで最大にして最も由緒ある伝統と権威を誇る都市。ユーフラテス川の両岸にまたがって建てられ、バグダッドの南約九〇キロに位置する。その建設は前二四世紀末のアッカド王サルゴンにさかのぼるが、重要な地位を獲得したのはバビロン第一王朝時代で、前一八世紀のハンムラビ王時代に最初の全盛期を迎えた。都市の描写はクルティウス(五・一・二四)と三五、ストラボン(一六・一・五(七三八C))。国土の豊かさや風習についてはヘロドトス(一・二九)と一九九。新バビロニア王国のネブガドネザル時代のバビロンについては、ベアトリス・アンドレ・サルヴィニ『バビロン』(文庫クセジュ)白水社、二〇〇五年に詳しい。

アレクサンドロスはアルベラからメニス(現キルクーク付近)を通過して、一〇月二〇日頃バビロンへ到着した。総距離は約四六〇キロ。その経路はクルティウス(五・一・一六)とストラボン(一六・一・四、七三七C))に言及がある。

四 住民たちは盛大にもてなした アレクサンドロスがバビロンに接近すると、総督マザイオスと住民代表たちが彼を出迎え、都市と財貨の引渡しを申し出た(アリアノス三・一六・三、クルティウス五・一・二七)と一八)。入城するマケドニア軍に対する華やかな歓迎の様子は、クルティウス(五・一・一九)と二三)が詳しく描いている。

さらにクルティウス（五・一・三六〜三九）は、バビロンの悪習がマケドニア人を墮落させたことにも言及する。バビロンと外国人征服者との関係については、森谷『征服と神話』一六二〜一六五頁。

**四 三〇日以上もこの都市に滞在した** クルティウス（五・一・三九）では三四日間。この間の重要な施策として、マルドゥク神への犠牲の奉納、マザイオスのバビロニア総督任命、マルドゥク神殿の再建指示があるが（アリアノス三・一六・四〜五）、ディオドロスは言及していない。

**五 アガトン** この人物についてはこれ以外不詳。クルティウス（五・一・四三）は三〇〇の傭兵を付け加える。前任者はペルシア人バゴファネスで、城砦と王室金庫を担当していた（クルティウス五・一・二〇）。

**五 アポロドロス** デイオドロスは彼がメネスと共に「バビロニアおよびキリキアまでの諸属州の將軍 strategos」に任命されたと記述し、クルティウス（五・一・四三）も二人が「バビロニアおよびキリキア地方を管轄する將軍 praetores」に任じられたと述べる。いずれもクレイタルコスに由来する不正確な記述で、キリキアに至る諸地域の將軍はメネス一人である（後述）。アリアノス（三・一六・四）は、アポロドロスの職務を「マザイオスとともに残される部隊の將軍 strategos」とする。アレクサンドロスは総督マザイオスから軍事権ばかりか徴税権も分離し、後者をマケドニア人アスクレピオドロスに与えた（アリアノス前引箇所）。それゆえアポロドロスは属州バビロニアを管轄する將軍に任命されて駐留軍を指揮し、彼の下にアガトンが都市バビロンの城砦指揮官として配属されたと考えられる。彼は大王の死去までこの職務に留まった（プルタルコス七・三・三、アリアノス七・一八・一）。

**五 メネスを…將軍に任命し** メネスはペラ出身でディオニュソスの子。前三三三年末に、キリキア総督となっ

たバラクロスの後任として側近護衛官に任命された(アリアノス二・二二・二)。デイオドロスはクルティウス(五・一・四三)と共に、彼の管轄領域にバビロニアをも含める。しかし右に述べたとおり、バビロニア総督はマイオス、バビロニアの軍指揮官はアポドロスであるから、この記述は典拠となった前三世紀の作家クレイタルコスに由来する誤りであろう。アリアノス(三・一六・九)はこの任命をバビロンではなく数週間後のスーサ滞在時に置き、その職務を「シリア、フェニキアおよびキリキアの総督 *hyparchos*」としている。彼の職務については二通りの解釈がある。第一は、三つの総督領にまたがる軍指揮官で、名目上は総督の下位に位置するというもの。第二は、三つの総督領の上立つ上級総督とするもの。ただし彼の職務が臨時のものであったと見る点では一致する。議論の詳細は、A.B.Bosworth, 'The government of Syria under Alexander the Great,' *CQ* 23, 1973, pp.27~43; Atkinson, pp.52f.

当時すでにギリシア本土におけるアギス蜂起の報せが届いており、他方でダレイオス追撃という最重要課題が残されていた。これら三つの総督領は東地中海に面して良港を備え、遠征軍と本土とを繋ぐ中継地にあたる。こうしてアレクサンドロスは、「動員業務や軍需輸送面で一元的、効率的に統括する、新たな指揮系統の創設」(大牟田訳註一五九七頁)を決断したのである。実際メネスは、与えられた資金で傭兵部隊を召集すること、資金の一部をスパルタとの戦争のため代理統治者のアンティパトロスに送ることを命じられた(クルティウス五・一・四三、アリアノス三・一六・一〇)。金額は、アリアノスでは三〇〇〇タラント、クルティウスでは一〇〇〇タラント(三三三〇年夏には、除隊したテッサリア騎兵およびギリシア同盟軍を無事にギリシアへ送り返すよう指示された(アリアノス三・一九・六))。さらにMの刻印のある貨幣を発行したことも知られているが、これは兵員の

徴募と輸送、兵站資材の調達等にも使われたであろう。このようにメネスの活動が軍事面ばかりか財政面にも及ぶことから、彼の役職は単なる將軍ではなく、三つの総督領にまたがる上級総督であったと考えられる。

**五 バビロニア** トイブナー版は写本Fに従ってバビロンとする。しかしここで記述されているのはマケドニア人指揮官の管轄範囲であるから、都市バビロンではなく属州バビロニアでなければならぬ。それゆえ写本Rに従ってバビロニアと読む。

**六 ミトレネスにはアルメニアを与えた** ミトレネスはペルシア人でサルデイスの城砦守備隊長であったが、前三三四年にアレクサンドロスに都市と城砦を明け渡し、その後は大王に同行していた(本巻二一・七、アリアノス一・一七・三〜四)。彼のアルメニア総督任命は、アリアノス(三・一六・五)とクルティウス(五・一・四四)も言及する。しかし当時のアルメニアはペルシア人オロンテスが総督として統治していた。オロンテスの家系はダレイオス一世時代の七名家の一人ヒュダルネスにさかのぼる。前五世紀末には先代のオロンテスがアルタクセルクセス二世の娘ロドグネと結婚し、アルメニア総督を務めていた(クセノフォン『アナバシス』二・四・八、三・四・二三)。しかし彼は前三八一年に終結したキプロス戦争が原因で失脚。その後小アジアのミュシヤ総督となり、前三六〇年代の総督たちの大反乱に参加したものの大王に寝返り、それから間もなく死去した。経歴の詳細は、

M.J. Osborne, 'Orontes,' *Historia* 22, 1973.

彼の息子オロンテスは、ダレイオス三世からアルメニア総督に任命され、ガウガメラの会戦ではアルメニア人部隊を指揮した(アリアノス三・八・五、ユスティヌス一〇・三・四)。会戦後はアルメニアに帰り、総督の地位を保持して独立状態にあったと考えられる。実際この地方にはアレクサンドロスの遠征はなされず、実効統治も行

なわれていない。それゆえミトレネスの任命は名目上のものにすぎなかった。ミトレネスのその後の消息が知られないことから、彼はアルメニア獲得のためオロンテスと戦って戦死したと推測されている (Hecker, p.168.)。こうした通説に対して Bosworth, pp.315f. は、ミトレネスが軍隊を伴わずに派遣されたことから、オロンテスはアレクサンドロスに投降してアルメニアを引き渡し、大王の宮廷に留め置かれたと考える。

なおアレクサンドロス死後の前三一七年にも、アルメニア総督のオロンテスが見出される (ディオドロス一九・三三・三)。彼は普通、右に述べたオロンテスとは同一人物と見られているが、*Die Neue Pauly*, Bd.9,S.50 は、彼を後者の甥と見なす。さらにストラボン (一一・一四・二五、五三二C) は、前三世紀末のアンテイオコス三世 (大王) 以前にこの地を統治したオロンテスに言及している。このように、少なくとも前五世紀末から前三世紀末まで、中絶はありながらもオロンテス家が代々アルメニア総督職を継承してきたことが伺える。

**六 褒賞として：与えた** この記述はクルティウス (五・一・四五) と一致する。ただしクルティウスにおける傭兵への「二カ月分」を「三カ月分」と校訂する案もある。東征軍兵士への給与額自体は不明だが、アレクサンドロスが遠征前にアテネと結んだ協定には、アテネ人重装歩兵への一日一ドラクマの手当支給が記されている (IG II<sup>2</sup> 329)。マケドニア人歩兵の日当もこれと同額だったとすれば、一ムナは一〇〇ドラクマだから、二ムナの褒賞は二〇〇日分に相当する。古典期ギリシアでは、騎兵の日当は歩兵の二倍 (トウキユデイデス五・四七・六)、または四倍 (クセノフォン『ギリシア史』五・二・二二) であった。他方で傭兵については、第三次神聖戦争中にフォキスが手当を五割増しにしており (ディオドロス一六・二五・一、三〇・一)、また多数のギリシア兵がペルシア側に雇われていた状況からしても、相場は高騰していたであろう。

六 マケドニア人騎兵 「マケドニア人」の語句は写本になく、トイブナー版で付加された。クルティウス（前引箇所）ではマケドニア人騎兵と明記されている。

## 第六五章

一 増援部隊 これを引率してきたのはアンドロメネスの子アミュンタス。前三三一年の晩秋、ガザ陥落の後にアレクサンドロスは、彼に新兵の徵募を命じて一〇隻の船と共に本国へ派遣した（本巻四九・一、アリアノス三・一一・九、クルティウス四・六・三〇。それ以前の彼の経歴は本巻四五・七註参照）。ちようどスパルタ王アギスが蜂起に備えて兵力を集めていた時期で、アミュンタスの新兵徵募はかなり困難であったと思われる。本隊との合流地点を、クルティウス（五・一・四〇）はバビロンに、アリアノス（三・二六・一〇）はスーサに置く。アリアノスには一つの主題に関連する出来事をまとめて一箇所で記述する傾向があるので、合流はディオドロスの述べるようにスーサへの進軍途上であったと見るべきか。アリアノスとディオドロスのいずれを採用するにせよ、増援部隊の到着は前三三一年一二月のこと（アレクサンドロス軍の移動の日程は後述）。本国からスーサまでの所要時間を三々四カ月とすれば、部隊がマケドニアを出発したのは八月頃であろう。アギスはまさにこの機会を捉えて蜂起したのであった。

増援部隊の内訳については、クルティウス（五・一・四〇〜四一）もディオドロスとほぼ一致するが、ペロポネソスからは「四〇〇〇の傭兵と三八〇の騎兵」としている。ディオドロスが言及するペロポネソスからの騎兵四〇〇〇は明らかに過大であり、クルティウスが正しいと思われる。総兵力は、ディオドロスでは一万五六〇〇、



クルティウスでは一万四九八〇。

一 **トラレス人** トラキア人の一部族だが、イリュリア起源とも伝えられる。クルティウス（前引箇所）ではトラキア人。

一 **護衛兵** 王の近習 *paides basilikoi* のこと。フィリップス二世が創設した制度で、十代後半の貴族の子弟が三年間王に奉仕し、身の回りの世話をした（アリアノス四・一三・一）。彼らは成人してからエリートとして要職に登用されたので、この制度は「偉大な総督や將軍たちの苗床、学校であった」（クルティウス五・一・四二）。

二 **シッタケネ行政区** ティグリス川下流東岸の平原地帯で、東はスシアナ、北はメディアに接する。ガウガメラの会戦でシッタケネ人はバビロニア人と共に部隊を編成し、ブパレスの指揮下にあった（アリアノス三・八・五）。それゆえシッタケネは独立の属州ではなく、バビロニア属州内の行政単位であったと考えられる。行政区と訳した原語は *satrapiæ* でなく *eparchia*。

二 **あらゆる物資が非常に豊富だった** 特に米・胡麻・棗椰子なつめやしが豊かであったという（ディオドロス一九・二三・六）。クルティウス（五・二・一）も「肥沃な土地で、あらゆる物資と食料であふれていた」と述べている。

二 **かなりの日数滞在した** バビロンからスーサまでは直線距離で約三六五キロ（Bosworth, p.316）。行軍の所要日数をアリアノス（三・一六・七）は二〇日と伝える。その間に増援部隊の到着と次節に述べられる軍の再編成があった。これに要した日数を、大牟田訳註一五九二〜一五九三頁は五日と見積もる。

二 **部隊の編成を点検し** デイオドロスの曖昧な言葉遣いとは対照的に、クルティウス（五・二・二〜六）とアリアノス（三・一六・一一）が部隊の再編成を具体的に記述している。クルティウスによると、新しく千人の部隊を

組織して千人隊長を新設し、八人（写本では九人）をこの地位に任命した。これによれば彼らが指揮する兵士の総数は八〇〇〇となる。しかし密集歩兵部隊は一隊が一五〇〇人で計六隊九〇〇〇人、近衛歩兵部隊は一隊が一〇〇〇人で計三隊三〇〇〇人なので、数字が合わない。しかもクルティウスが列挙する八人の指揮官は詳細不明な者ばかりで、近衛歩兵の千人隊を指揮した事実は見出されない。そこで通説は千人隊長を五百人隊長の誤記と見なし、増援部隊の到着に伴って近衛歩兵部隊が四〇〇〇人に増員され、四大隊が各々二つの五百人隊に区分されて、八人の五百人隊長が任命されたと考える（Bosworth, p.149, 以下）。これに対しては、密集歩兵部隊から特別任務のために八〇〇〇が選抜されたとする説（Hannond）、増援部隊を編入して七番目の密集歩兵部隊が追加されたとする説（Mills）、密集歩兵部隊の各隊が一五〇〇から二〇〇〇に増員され、各大隊が二つの千人隊に区分されて計一二人の千人隊長が任命されたとする説（Atkinson）などが提出されている。学説状況は Atkinson, pp.57~59.

他方で騎兵については中隊（*lochros*）の区分を新設し、各騎兵部隊を二箇中隊で編成した。さらに従来の出身部族ごとの編成を取り払い、各指揮官はアレクサンドロス自身が選抜して任命することにした（アリアノス前引箇所、クルティウス五・二・六）。

このような軍制再編の目的としては、大牟田氏の次の説明が適切である。「ガウガメラの会戦後もはや大軍同士の衝突、「会戦」の生起する可能性が少なくなったことからむしろ、今後予想される山地戦や攻城戦にそなえ、歩騎両集団とも随時、有効敏速に分割、あるいは組み合わせ運用ができるよう、既成の戦闘単位や指揮系統を見なおすことであつたのであろう」（大牟田訳註一六〇一頁）。

**三 細心の注意を払って評定し** クルティウス(五・二・二〜五)は、アレクサンドロスが兵士たちを競争させ、審判人の判定にもとづいて八人を昇進させたと述べる。ただし具体的な判定基準や実施方法は不明。

**五 スーサ** イラン南西部フーゼスタン地方、エウライオス河畔にある古代都市(現シュールシュ)。前三千年紀半ば以降エラム王国の都となり、最盛期は中エラム時代(前一六〇〇〜一一〇〇年頃)。前六四〇年代にアッシリア王アッシュルバニバルによって占領・破壊されたが、ダレイオス一世が再建し、アケメネス朝ペルシアの行政の中心地となった。ストラボン(一・五・三・二〜三、七二七〜八C)によると、市の周囲は二〇〇スタディオ(三六キロ)あり、宮殿はとりわけ美しく飾られ、宝蔵も作られた。周辺の土地は肥沃で、夏には炎暑に襲われたが(同一・五・三・一〇〜一一、七三二C)、ペルシア王たちはその土地の美しさと快適さを称え、冬の宮殿として用いた(アテナイオス一二、五一三f)。発掘は一八五四年から近年まで、フランスの調査隊によって行なわれた。遺跡の総面積は約一二〇ヘクタール、周囲の平原からは一五〜二〇メートルの高さがあり、アクロポリス、アパダーナ、王都、技術者の町と名付けられた四つの丘からなる。

**五 接收した** アレクサンドロスはガウガメラの会戦直後に側近のフィロクセノスをスーサへ派遣しており、シアナ総督アブレテスはこのフィロクセノスに都市と財貨を譲渡した(アリアノス三・一六・六)。ペルシア側で最初に王を迎えたのは総督の息子オクサトレスで、彼がスーサまで道案内した(アリアノス前引箇所、クルティウス五・二・八)。オクサトレスはガウガメラでウクシオイ人とシアナ人を指揮し(アリアノス三・八・五)、翌年には大王からパライタケネ総督に任命された(同三・一九・二)。Atkinson, p.63 は、オクサトレスがガウガメラで捕虜となり、フィロクセノスは彼を伴ってスーサへ赴いたと推測する。

**五 総督のアブレテス** 彼の名前は三通りに伝えられている。ピュデ版とロエプ版は写本Fに従いアブレテス（プルタルコス六八・七も同じ）、トイブナー版は写本Rに従いアブレウテス（Atkinson, p.63は、これを bouleutes に影響された誤記と見る）、クルティウス（前引箇所）とアリアノス（三・一六・九）ではアブリテス。ここではFに従う。

アブレテス自身が豪華な贈物を携えて、コアスベス河畔で大王を迎えた。その中には快足の駱駝と一二頭の象が含まれていた（クルティウス五・二・一〇）。彼はアレクサンドロスから総督の地位を安堵され（同五・二・二七）、後には山地ウクシオイ人の支配も委ねられた（同五・三・一六）。しかしアレクサンドロスがインドから帰還した前三二五年、彼はスーサでの違法統治の責任を問われた上、ゲドロシア砂漠横断中のマケドニア軍に適切な援助をしなかったとの理由で、息子と共に処刑された（アリアノス七・四・一、プルタルコス六八・七）。

**五 すすんで彼に都市を譲渡した** 総督アブレテスに抵抗の余地はなかった。その理由は Atkinson, pp.63f.によれば次の三点である。第一にスーサには城壁がなかった（ストラボン一五・三・二、七二八C）。第二に住民は他民族で、一丸となつての抗戦は不可能だった。第三に、息子オクサトレスが捕虜となつていた。

**五 ダレイオスが部下たちに命じた** クルティウス（五・一・四六）は、ガウガメラの会戦直後にダレイオスがアルペラで部下たちに行なつた演説を記録しており、その趣旨はディオドロスがここに記した内容と一致する。ダレイオスの意図自体は当時の状況に適合するが、典拠は不明。またアブレテスによるスーサ開城がダレイオスの命令に従つたものであるとは考え難い。

## 第六六章

一 **四万タラントンを越える…金と銀** アリアノス(三・一六・七)では五万タラントンの銀に相当する財貨、クルティウス(五・二・一一)では鑄造していない五万タラントンの銀、プルタルコス(三六・一)とユステイヌス(一一・二四・九)では四万タラントンの鑄造貨幣。

二 **ダレイオスの…金貨** ダレイコス金貨に言及するのはディオドロスのみ。ダレイオス一世が最初に鑄造した最も標準的なペルシア金貨で、裏面には弓を射る王の像が彫られていた。

三 **玉座について** プルタルコス(三七・七)は、アレクサンドロスが初めて玉座についたのはペルセポリスであるとする。公式の即位式は記録されておらず、この場面も衝動的な振舞いにすぎない。以下の場面はクルティウス(五・二・一三〜一五)にも見られ、明らかに両者が典拠とした前三世紀の作家クレイタルコスに由来する。

三 **体の寸法より大きかった** アレクサンドロスの体格が決して大きくなかったことは、ヘファイステイオンよりも背丈が低かったとの記録(アリアノス二・二・六、クルティウス三・二・一六)や、アマゾン族の女王が彼に会った時の印象(クルティウス六・五・二九)からも伺える。しかし、なぜペルシア王の玉座がそれほど高かったのかは説明できない。

三 **足台** ペルセポリスの宝蔵で発見されたレリーフでは、玉座についたダレイオスは足台に両足を載せている。歴史家デイノンによれば、「王が馬車から降りるとき、地面までの高さはさほどではないが、王は決して飛び降りたり、人に手を貸してもらったりはせず、必ず金の踏み台を置かせ、これを踏んで降りる。そのために、王の踏み台連びの者が随行した」(アテナイオス二・一、五一四 a、柳沼重剛訳)。またクマイのヘラクレイデス『ペル

シア史』では、「宮廷の中では王は歩いたが、王の行く所どこにでもサルデイス絨毯が敷いてあり、王のほかはだれも、その絨毯の上を歩かなかった。宮廷の端まで来ると、王は車、時には馬に乗った。宮廷の外では、王が歩いているのを見た者はなかった」（同五一四c）。ペルシア王が決して足を地面に触れなかったのは、あたかもレリーフにおいてアフラマズダが空中に漂って描かれるのと同じである。それは宗教的な儀式というより、神によって特別な力を付与された王に対する敬意のゆえであった。cf. S.K.Eddy, *The King is Dead: Studies in the Near Eastern Resistance to Hellenism*, Lincoln, 1961, p.44.

## 第六七章

一 **ダレイオスの母と娘たちと息子** いずれもイツソス会戦後に捕虜となり、遠征軍に同行させられていた。母はシシュガンピス、娘はスタティラとドリユペティス、息子はオコス（本巻三六・二、三七・三〜三八・二および訳註参照）。娘たちにギリシア語を学ばせたのは、将来の結婚を見越してのことかもしれない。

一 **軍と共に進発し** デイオドロスはスーサの残留部隊にまったく言及していない。アレクサンドロスはアブレテスを総督に任命したほか、テオドロスの子アルケラオスをスーサの軍指揮官として三〇〇〇の部隊を付け、城砦の指揮官にはクセノフィロスを任命して一〇〇〇のマケドニア人古参兵を与え、宝物庫の管理はカリクラテスに委ねた（クルティウス五・二・一六〜一七）。アリアノス（三・一六・九）は城砦の指揮官をマザロスとするが、これはイラン系の名前であり、前任者と取り違えたのであろう（Bosworth, p.319）。なおクセノフィロスは後継者戦争期までその地位を保持し、前三一七／六年にはスーサの城砦指揮官および財貨監督官を務めている（デイ

オドロス一九・一七・三、一八・一、四八・六)。Heckel,p.272 注、スーサを接収したフィロクセノス(本巻六五・五訳註参照)と同一人物である可能性が強いとする。

一 『パシティギリス川』 現カールーン川。ティギリス川の下流域がパシティギリス川と呼ばれる場合もある。

付近にはエウライオス川、コアスベス川、コプラタス川なども流れ(ストラボン一五・三・四、七二八〜九C)、現在の河川との比定には多くの議論がある。マケドニア軍の渡河点については、南方の現アフワーズ付近とする説と、より北方の現シューシュタル付近とする説の二つが有力である。アフワーズ説は、スーサ進発後四日目に川に着いたというデイオドロス本節の記述に適合するが、ペルセポリスへ向かう道筋からは西に大きく逸れる。

シューシュタル説は、渡河した後のウクシオイ人地域への侵攻に合致するが、スーサとシューシュタルの間は直線距離で六〇キロしかなく、四日目の渡河との整合性に問題が残る。シューシュタル説を採る Speck,pp.20~22 は、スーサとパシティギリス川の間を流れるコプラタス川が現デズ川であるとし、全軍がデズ川を渡るのに丸一日を要したと考えてこの難点を解決する。

三 **ウクシオイ人** スシアナ州内のザグロス山脈一帯、ペルシス地方に隣接する地域に住んでいた民族。アリアノス(三・一七・二)は平地ウクシオイ人と山地ウクシオイ人を区別している。平地ウクシオイ人はスシアナ州総督に服属し、ガウガメラの会戦にも参加(同三・八・五)、アレクサンドロスに対して自発的に降伏した(同三・一七・二)。本節に記述される沃野は、平地ウクシオイ人の居住地域を指す。他方山地ウクシオイ人は山賊を生業とし、ペルシア大王の移動の際には通行税を取っていた(ストラボン一五・三・四、七二八C)。彼らはアレクサンドロスに対しても通行税を要求し、そのために両者の戦闘が起きた。彼らの居住区域については、戦闘地域の同

定ともからんで諸説ある。

**三 商人たちは：バビロニアへ下ってくる** パシテイギリス川を船で航行できるのは現アフワーズまで。バビロニアへ達するにはパシテイギリス川を下った後、ユーフラテス川を遡行しなければならない。ディオドロスは両河川の関係についての説明を、誤った箇所位置いたと考えられる (Goukowsky, pp.218f.)。

**四 マデテス** クルテイウス (五・三・四) ではメダテスで、この地域の *praefectus* と呼ばれている。これを総督ととるか、総督の下位にある行政長官と見るか、解釈は分かれる。彼はダレイオスの母シユガンピスの妹の娘婿で、ダレイオスとは姻戚関係にあった (クルテイウス五・三・一一)。

**四 隘路を守っている** この戦闘については、アリアノス (三・一七・二六) と、ディオドロスおよびクルテイウス (五・三・四一五) で大きく異なる。クルテイウスでは、メダテス自身がウクシオイ人を指揮して隘路を守ったが、アレクサンドロスは彼らの町を正面から攻撃する一方、地元民の案内で別動隊を町の上方に派遣し、彼らを完全に包囲した。ウクシオイ人はシユガンピスに嘆願し、彼女の執り成しで税の免除と自由を得た。他方アリアノスではメダテスは現れず、ウクシオイ人集落の略奪に続いて隘路への攻撃が行なわれ、このあとシユガンピスが嘆願したものの、毎年大量の家畜を貢納することを命じられた。

通説はこの隘路を現ヌーラバード近郊のコタリ・サンガルに比定する。しかしこの地点からスーサまでは四五〇キロもあり、とても短時間でシユガンピスと連絡が取れる距離ではない。一方 Speck, p.157 はこの隘路を、シユーシユタルとマスジェド・ソレイマンの間のザグロス山脈入口であると指摘した。筆者は二〇一一年九月に行なった現地調査で、この隘路を確認することができた。現在の道路もこの隘路を通っており、平地から上って



くる軍隊を阻止するには絶好の地形である。ここからスーサまでは直線距離で約八〇キロなので、ウクシオイ人がスーサに居るシシュガンピスと連絡を取り合うことは十分可能である。

**五 十分な数の兵士をこの者につけて** クルティウス（五・三・六）によれば、部隊は一五〇〇の傭兵と約一〇〇〇のアグリアネス人で、指揮官はタウロン。タウロンはマカタスの子でハルパロスの兄弟、上部マケドニア地方の旧エリメリア王国の王族出身である。

**五 すべての都市を獲得した** アレクサンドロスは山地ウクシオイ人をスシアナ州総督の支配下に置いた（クルティウス五・三・一六）。隘路から先は現在の道路で約一〇キロに亘って険しい谷が続き、これを抜けると平坦な高原に出る。ウクシオイ人の居住地は、現在のマスジエド・ソレイマンから南方に広がっていたと考えられる。

## 第六八章

**一 ペルシス地方へ進み** ペルシスはザグロス山脈の南東部で、ペルシア王国発祥の地。現在のイラン・イラク共和国ファールス州。古代ギリシア語ではパールサと呼ばれ、ペルシスは首都ペルセポリスをも意味した。アレクサンドロスは軍勢を二手に分け、パルメニオンに輸送部隊を委ねて「王の道」を通じてペルセポリスに向かわせる一方、彼自身は山間の隘路へ進んだ（アリアノス三・一八・一〜二、クルティウス五・三・一六）。後継者戦争史の記述においてディオドロス（一九・二・二）は、パシティグリス川からペルセポリスまでの道程を二四日としている。

**一 スシア門** 通説では、ペルシア人はこの隘路を「スシア門」と呼び、スシアナ人は「ペルシア門」と呼んだ。

これに対して Speck, p. 49 ff. スシアナ州とペルシス州の境界は一本の線ではなく面であり、境界領域の両端にスシア門とペルシア門がそれぞれに存在したと主張する。よってアリオバルザネスが防衛したのはスシア門ではなく、ペルシア門となる。ペルシア門の位置については、通説が現ヌーラバード近郊を流れるフアーリアン川に沿ったモハンマド・レザ溪谷に比定するのに対し、Speck, p. 161 ff. は、現ヤスジ郊外のメーリアン溪谷にこれを発見した。筆者が行なった現地調査により、Speck 説が正しいことを確認した。詳細は別稿に譲る。

一 **アリオバルザネス** ペルシス州の総督で、ガウガメラの会戦ではペルシア人とマルドイ人の部隊を指揮した(クルティウス四・一二・七)。クルティウス(五・四・三三〜三四)によると、彼はペルシア門での混戦から逃れてペルセポリスへ戻ったが、守備隊によって締め出され、追撃してきたマケドニア軍との戦闘で戦死した。これに対してアリアノスによれば、彼は少数の騎兵と共に逃れ(三・一八・九)、ダレイオス三世の死後に名門貴族で父親のアルタバゾスと共に大王に投降した(三・二三・七)。ペルシス総督とアルタバゾスの息子を同一視する学者は、彼がペルセポリスを脱出してエクバタナの宮廷にたどりつき、その後父親と共にダレイオス三世に付き従ったとする。諸家の解釈も二つに分かれるが、ここではクルティウスを採用し、彼はペルセポリス付近で戦死したと考えたい。

一 **二万五〇〇〇の歩兵と三〇〇の騎兵** アリアノス(三・一八・二)では歩兵四万と騎兵七〇〇、クルティウス(五・三・一七)では歩兵二万五〇〇〇。

二 **突如として攻撃を開始した** この場面はクルティウス(五・三・一八〜二三)とほぼ一致する。マケドニア軍は隘路に侵入したところを高めからの攻撃を受け、退却して陣地を築いた。アリアノス(三・一八・三)では、ペ

ルシア側が隘路を防壁で塞いでいるのを見てアレクサンドロスは一旦陣地を築き、翌日に攻撃をしかけたが、損害を受けて陣地に退却した。实地調査の結果、岩落としての崖をメーリアン溪谷に見出すことができた。ここでは軍が進入できるのは水の流れる狭い谷底しかなく、両側の崖から岩を落とされると完全に立ち往生してしまう。これに対してモハンマド・レザ溪谷では、一方の山の傾斜が緩やかで、兵士は岩を避けて容易に迂回することができる。

**四 三〇〇スタディオンの退却して** この数字は写本Rによる。写本Fでは四〇〇スタディオンの。それぞれ五四キロメートルと七二キロメートルで、山岳地帯の戦闘ではあり得ない距離である。クルティウス（五・三・二三）とポリュアイノス（四・三・二七）では三〇スタディオンの（五、四キロメートル）で、こちらの数字が合理的。

**五 バイリンガルの男** クルティウス（五・四・四）は彼がギリシア語とペルシア語を解したとする。プルタルコス（三七・一）によると、彼の父はリュキア人で母はペルシア人。よって正確にはリュキア語、ギリシア語、ペルシア語の三方国語を話した。なおペルシスにおける案内人の出現を、デルフォイの神託が予言していたとの伝承があった。詳しくは森谷『王宮炎上』一八八〜一九一頁。

**四 戦死者を埋葬せずに放置するのは不名誉** 「マケドニア人たちにとり、戦争において味方の兵士たちを埋葬することは最も神聖な義務であった」（クルティウス五・四・三、谷・上村訳）

**六 多大な褒美** ペルセポリスの宮殿放火の翌日、大王は彼に三〇タラントンを与えた（クルティウス五・七・一二）。他の史料には言及がなく、時期も金額も疑わしい。

**六 夜間に山を踏破した** 踏破に要した時間はアリアノス（三・一八・五〜六）では一晩、クルティウス（五・四・

一七〇二七)では二晩。クルティウスは王が兵士に三日分の食料を持たせたことを付け加えている(五・四・一七)。アリアノスの記述には大王の急速前進を強調する意図が明らかで、クルティウスを採用すべきである。

なおディオドロスは、マケドニア軍陣地の残留部隊と、行軍の途中で分かれた別動隊を省略している。アレクサンドロスは陣地にクラテロスとメラアグロスの歩兵部隊、さらに若干の弓兵と騎兵を残した(アリアノス三・一八・四、クルティウス五・四・一四)。次いで行軍途中の尾根で、フィロータスとコイノスの軽装部隊、アミュンタスとポリュペルコンの歩兵・騎兵混成部隊に別の道をとって進むよう命じた(クルティウス五・四・二〇)。

**七 第三列を敗走させ** アリアノス(アリアノス三・一八・六〇七)でも、ペルシア軍の最前線には三つの警備隊が配置されていた。メーリアン溪谷には、ペルシア軍の本陣があつたと思われる平坦な地形が山の中腹に広がっている。

**七 関門を制圧して** アレクサンドロスの本隊がペルシア軍陣地を攻撃すると同時に、ラツパの合図を受けたマケドニア軍残留部隊が陣地から出撃、さらにフィロータスらの別動隊が隘路の反対側から攻撃を加えた(アリアノス三・一八・七〇八、クルティウス五・四・二八〇三三)。

## 第六九章

**一 ティリダテスからの手紙** クルティウス(五・五・二)はティリダテスを「王室財産管理官 *custos pecuniae regiaie*」と呼んでいる。彼はアリオバルザネスとその残党がペルセポリスへ侵入することを防いだ上(同五・四・三四)、ペルセポリス守備隊が王の財宝を略奪しようとしている事実をアレクサンドロスに知らせて、アラクセ

ス川からの道を確認した（同五・五・二）。こうして彼は、マケドニア軍がペルセポリスを占領して財宝を無事に接収することに決定的な役割を果たした。

**二 アラクセス川に架橋して** アラクセス（現ボルヴァール）川はザグロス山中を南西に流れ、パサルガダイとペルセポリス付近で蛇行して、Darvace-ye-Task の塩湖に注ぐ。クルティウス（五・五・四）によると、アレクサンドロスは付近の村を破壊し、その木材を使って石の土台の上に橋を作った。これに対してアリアノス（三・一八・六、一〇）は、ペルシア門での迂回行動の途中で、フィロータスら三人の指揮官率いる歩兵部隊が架橋のために川へ派遣されたとする。本隊が関門のペルシア軍を打ち破って川に到着すると、すでに橋が架けられており、全軍は難なく川を渡ったという。しかしペルシア軍との戦闘を目前にして、一〇〇キロも離れたアラクセス川へ大部隊が派遣されたとは考えにくい。アリアノスの典拠であるプトレマイオスの作為を想定すべきであろう。詳しくは大牟田訳註一六〇九〜一六一二頁。

**二 思いもよらぬ恐ろしい光景** クレイタルコスに由来する扇情的な場面。ペルシア人の暴虐に対するギリシア人の憎しみを掻きたて、これに続くペルセポリスの略奪と放火を正当化するための創作である。クルティウス（五・五・五〜二四）の描写はより詳細、ユスティヌス（一一・一四・一一）は短く言及する。

**三 故国から連れ去られたギリシア人** この逸話が創作であるにしても、創作の根拠となる事実を指摘することはできる。前四九四年にイオニア反乱が鎮圧されると、ミレトスの住民は捕虜としてスーサに送られ、それから紅海に面したアンペに移された（ヘロドトス六・二〇）。前四九〇年、ペルシア軍はエウボイア島のエレクトリアを陥落させ、マラトンでの敗戦後にエレクトリア市民を奴隷としてスーサに連行。ダレイオス一世は彼らをスーサ近

郊のアルデリツカに住ませた（ヘロドトス六・二〇一、一一九）。彼らの子孫がアレクサンドロス軍の侵攻を知って駆けつけたと想像するのは、あながち的外れではないだろう。森谷『王宮炎上』一八三〜一八六頁。

**三 体に障害を負わされ** ヘロドトスからは、アケメネス朝が四肢切断を処罰に用いたことが伺える。ダレイオス一世のバビロン包囲戦の際、高官ゾピュロスは自分の鼻と耳を切り落とし、体に鞭を加え、これを王の処罰だと偽ってバビロン人を欺き、都市を陥落させた（三・一五四、一五七）。クセルクセスの妃アメストリスは、個人的な恨みから王弟マシステスの妻に対し、乳房、鼻、耳、唇、舌を切り取るという暴行を加えた（九・一一二）。ユステイヌス（前引箇所）がこれらギリシア人の障害を「捕虜の罰 *poena captivitatis*」と呼んでいるのは、こうした伝承にもとづくと思われる。

**三 およそ八〇〇人** ユステイヌス（前引箇所）も八〇〇人、クルティウス（五・五・五）では約四〇〇〇人。Atkinson, p.105 は、八〇〇が本来の数字であったとする。

**四 知識や技術を身につけて** ペルシアの宮廷には、医師、彫刻家、画家、建築家を始めとする多くのギリシア人技術者が滞在していた。このことも逸話創作の根拠となり得る。

**五 リーダーたちを呼び寄せ** クルティウス（五・五・八）では、アレクサンドロスは彼らを励ました後、都市から二スタディオン（三六〇メートル）離れた所に陣地を築いた。

**六 集まって協議した** クルティウス（五・五・九〜二一）は二人のギリシア人の発言を伝えている。まずキュメのエウクテモンが、帰国して見世物になるよりこの土地に留まるべきだと述べ、次いでアテネのテアイテトスが祖国帰還を訴えた。後者を支持する者はわずかであった。

七 再び王に面会して 一〇〇人ほどが代表に選ばれた(クルティウス五・五・二一)。

八 各人に三〇〇〇ドラクマ：： クルティウス(五・五・二四)でもほぼ同様で、三〇〇〇ドラクマと一〇着の衣服(性別には言及せず)、土地と牛馬と穀物(分量には言及せず)。

## 第七〇章

一 ペルセポリス ダレイオス一世(在位、前五二二〜四九五年)が建設を開始したペルシア帝国の首都。彼が即位すると全土で反乱が起きたが、彼は一年がかりでそれらを鎮圧し、その中でも特に重要な勝利を記念して新都の建設に着手した。クーヘ・ラフマト山の麓から平野部にかけて基壇が造成され、その上に宮殿群が建てられた。基壇は南北約四〇〇メートル、東西約三〇〇メートル、高さは一二〜一四メートルに及ぶ。主な建物はアパダーナ(謁見殿)、玉座の間(百柱殿)、宝蔵、万国の門、会議の間、後宮で、ダレイオス一世、クセルクセス、アルタクセルクセス一世の計三代をかけて作られた。壮麗な宮殿群は帝国の権力と威信を象徴し、全土から集められた夥しい財宝は大王の富を誇示するもので、ペルセポリスはペルシア人の精神的支柱となった。建設の過程と建物の詳細は、森谷『王宮炎上』二〇〜四〇頁。

一 敵の最たるものだと行って指し示し クルティウス(五・六・二)がアレクサンドロスの言葉を伝えている。

「あの雲霞のごとき大軍勢が押し寄せてきたのもここからであり、かつてダレイオスが、次にはクセルクセスがヨーロッパに不敬な戦をしかけてきたのもここからであった、この都を壊滅させて先祖への弔いとしなければならぬ」(谷・上村訳)。

一 **王宮を除いて：略奪の餌食** ペルセポリスにおける略奪は二度行なわれた。すなわち前三三〇年一月の占領直後の都市部に対する略奪と、同年五月の出発直前に宮殿内でなされた略奪である。ディオドロスはこれら二つを混同し、一般住民に対する暴行・凌辱と宮殿の破壊をひとまとめに描いている。クルティウス（五・六・四八）も同様。

ペルシア帝国の首都のうち、バビロンとスーサではマケドニア軍による略奪は一切なかった。そこにはアケメネス朝以前から栄えていた重要都市を平和裏に帰順させるという政治的配慮があった。これに対してペルセポリスでは、アレクサンドロスは初めて略奪行為を許した。略奪は勝者の権利、征服の報酬であり、兵士の士気高揚の手段でもある。アレクサンドロスは、ペルシア帝国最大の首都を占領した今こそペルシア人に対する報復を完遂すべく、将兵の欲望を一気に解き放つたのである。ディオドロスとクルティウスは、兵士たちの残忍非道、強欲のあまりの同士討ち、住民が被った凄惨な災難を描いているが、いずれもクレイタルコスに由来すると思われる。

六 **女たちは：捕虜として奴隷に仕立てた** クルティウス（五・六・八）によると、住民の犠牲の大きさに直面して、アレクサンドロスは兵士たちに住民の身体と女性の衣装には手をかけてはならないと命じた。

## 第七章

一 **城砦に上り** 基壇の北西部に作られた一一一段の階段を上がり、万国の門を通って右へ進むと、正面にアパダーナがある。



一 **キュロス** カンビュセス一世の子で、ペルシア帝国の建設者であるキュロス二世。前五五九年、当時メディア人に服属していたペルシアの王となり、前五五〇年にメディア王国を倒して独立。活発な征服活動を進めて前五三九年にバビロンを占領し、大帝国を打ち立てた。前五三〇年、中央アジアのマッサゲタイ人との戦いで戦死。彼の生涯は、数奇な出生譚も含めてヘロドトス第一巻に詳しい。

一 **金を銀に換算して** 金と銀の換算比率はペルシアでは一対一三、ギリシアでは一対一〇。おそらくギリシアの基準で計算された。Gutkowsky, p.99.

一 **二万タラント** クルティウス(五・六・九)も同じ数字を伝え、これにパサルガダイでの六〇〇〇タラントンを付け加えている。ディオドロスはパサルガダイ占領には全く触れていない。これはキュロス二世が建てた都で、ペルセポリスの北東八〇キロ、アラクセス川が潤すダシュテ・モルガブ平野にある。その名はキュロスの出身部族の名前に由来。ペルセポリスの建設後は王の即位式に使われた。総督ゴバレスが都市を明け渡し、マケドニア軍が無血占領した(クルティウス五・六・一〇)。キュロスの墓とその他パサルガダイ関連史料については、森谷『王宮炎上』七〇〜七三頁。

二 **大量の荷駄用と荷車用の騾馬**：…プルタルコス(三七・四)では騾馬二万頭と駱駝五〇〇〇頭、クルティウス(八・七・一一)では騾馬三万頭。

二 **あらかじめ決めた場所へ輸送した** 最終的にエクバタナへ送られ、ハルパロスがその管理を委ねられた(アリアノス三・一九・七)。

三 **住民に対しては強い憎しみを抱き** ペルセポリスの貴族と住民はマケドニア人の略奪行為のゆえに、アレク

サンドロスへの帰順を拒否したらしい。クルティウス（五・七・二）も、被征服者が「新しい支配を拒否した」と述べている。業を煮やしたアレクサンドロスは、ペルシア人の誇り高い民族意識を挫くため、彼らへの懲罰として宮殿放火を決意したと考えられる。森谷『王宮炎上』一六五〜一七三頁。

三 **王宮について手短に語る** 以下の描写は実際の遺跡と適合せず、ディオドロスがどこから情報を得たのかは不明である。

四 **第一の城壁** クレフターによるペルセポリスの復元では、基壇の外周のほとんどに防壁が作られ、北辺の防壁は山の斜面に続く。FKrefter, *Persepolis: Rekonstruktionen*, Berlin, 1971.

七 **四プレトロン離れて** どこからの距離を指すのか不明。基壇東側の防壁から外には山の斜面が延びるが、王の墓までの距離は一二〇メートルより小さい。

七 **歴代の王の墓** ペルセポリスを見下ろすクーヘ・ラフマト山の西斜面に彫られた、アルタクセルクセス二世とアルタクセルクセス三世の岩窟墓。ダレイオス三世の墓は未完（本巻七三・三註参照）。またペルセポリスから北へ六・五キロ離れたナグジェ・ロスタムに、ダレイオス一世、クセルクセス、アルタクセルクセス一世、ダレイオス二世の岩窟墓がある。これらの王墓については E.F.Schmidt, *Persepolis III: The Royal Tombs and Other Monuments*, Chicago, 1970.

八 **宝蔵** 基壇の南東隅にある細長い建物。始めは小規模な建物であったが、征服に伴う戦利品や諸民族の貢納によっておびただしい財宝がもたらされ、大規模に拡張された。約一〇〇の部屋と広間に区分されていた。

## 第七二章

二 **タイス** アテネ出身の有名な遊女。喜劇作家メナンドロスは作品の一つに彼女の名前をつけた。後にエジプト王となるプトレマイオスの愛人で、遠征中に二人の息子と一人の娘を生んだ（アテナイオス二三、五七六e）。二人の息子の実在は他の史料からも確認できる（森谷『王宮炎上』九四頁）。彼女がアレクサンドロスを唆して宮殿に放火させた場面は、プルタルコス（三八・二〇六）とクルテュウス（五・七・三〇七）もほぼ同様に記述している。これがクレイタルコスに由来することは、アテナイオス前引箇所が述べている通り。タイスの物語は、ペルシア人に対するギリシア人の復讐心を満足させるための創作である。これに対してアリアノス（三・一八・一〇一―一二）だけは、放火の是非をめぐる大王とパルメニオンの対話を伝えている。宮殿への放火が酒宴の席での衝動的な行為ではなく、意図的・計画的になされたことは、発掘の成果に照らして明らかである。詳しくは森谷『王宮炎上』一二三―一四一頁、『征服と神話』一七八―一八〇頁。

六 **王宮一帯は：燃え落ちてしまった** 発掘によって火災の痕跡が確認されたのは、アパダーナの大広間と多数の小部屋、玉座の間の大広間と列柱廊、宝蔵の約半分、後宮の四つの部屋である。アパダーナの大広間の床はムラなく一様に燃えており、可燃物が敷き詰められたことを示唆する。また後宮以外で炎上した広間の柱はすべて破壊されていた。

## 第七三章

一 **ペルシス地方の諸都市** ペルシス地方の征服については、クルテュウス（五・六・一一―一九）が詳しく記述

している。それによると、アレクサンドロスは四月初めに騎兵一〇〇〇と軽装兵を率いて出発し、略奪を生業とするマルドイ族ほか多くの村々を征服して三〇日後に帰還した。Atkinson, p.119 は、遠征の日数からみて、行動範囲はペルセポリスの北二二五キロ以内であると推測する。

一 **ダレイオス目指して進発した** アレクサンドロスがペルセポリスを進発し、ダレイオスの滞在するエクバタナへ向ったのは、前三三〇年五月下旬のこと。ペルセポリス到着から四か月たったいた。

二 **軍を集めるつもり** クルティウス（五・八二く四）によれば、ダレイオスは逃走ではなく戦闘の準備として、三万の歩兵（うちギリシア人傭兵が四〇〇〇）、投石兵と弓兵計四〇〇〇を集め、これに騎兵三〇〇〇（大半はバクトリア人）が加わった。アリアノス（三・一九・三く四）によると、ダレイオスは再度の決戦のためスキタイ人とカドゥーシオイ人を招集したが、彼らは到着しなかった。

二 **急迫を受けて** アレクサンドロスがダレイオスの逃走を知ったのは、エクバタナまで三日行程の地点であった（アリアノス三・一九・四）。ここからアレクサンドロスの急迫が始まる。ディオドロスの記述は、二人の王の行動と互いの連関を極度に切り詰めている。

二 **ペルシア人三万とギリシア人傭兵** アリアノス（三・一九・五）では、エクバタナ進発時のダレイオスの兵力は歩兵六〇〇〇と騎兵三〇〇〇で、七〇〇〇タラントンの資金を携えていた。

二 **バクトラへ向けて逃走した** バクトラは属州バクトリアの首都で別名ザリアスパ。現在のアフガニスタン北部、マザリシャリフ近郊のバルフ。クルティウス（五・八く一二）はダレイオスの逃避行からベッソスによる捕縛までを、陰謀の細部も含めて詳細に描いている。Bosworth, p.334 がこの記述を史実として受け入れるのに対

し、Atkinson, p.135 は文学的な創作と見なす。大牟田訳註一六一八〜一六一九頁。

二 **ベッソス** ダレイオス三世の縁戚（アリアノス三・二一・五）。属州バクトリアは東方における帝国支配の要であり、歴代の総督には王族が任命された。ベッソスはイッソスの会戦後にダレイオスによって召集され、ガウガメラの会戦では左翼でバクトリアおよびソグディアナの騎兵を指揮した（アリアノス三・八・三、クルティウス四・二一・六）。

二 **捕えられ殺害された** アリアノスによれば、ダレイオスを拘束したのはベッソス、千人隊長のナバルザネス、それにアラコシア・ドラングアナ総督のバルサエンテスの三人（三・二一・一）、殺害したのはバルサエンテスとアレイア総督サティバルザネスの二人（三・二一・一〇）。サティバルザネスはナバルザネスと取り違えられた可能性もあるが、彼も当初から大王に対する陰謀に関与していたと思われる。

三 **騎兵とともに追跡し** この追跡の様子は、アリアノス三・二〇〜二一およびクルティウス五・一三・一〜二二に詳しい。大牟田訳註一六二五〜一六三四頁。

三 **死んでいるのを発見し** ダレイオスの死亡地点として有力なのは、ラガイから東へ約三四〇キロのダムガン、または四二〇キロのシャールード。アレクサンドロスは自分のマントを脱いで遺体にかけたという（プルタルコス四三・五）。ダレイオスの死去は、アテネ暦で前三三〇／二九年のヘカトンバイオン月のこと（アリアノス三・二二・二）。通説では前三三〇年七月中旬から下旬にかけて。Bosworth, p.312 は八月とする。

ダレイオス最期の場面については、ロマンチックな創作が伝えられている。クルティウス（五・一三・二三〜二五）とプルタルコス（四三・三〜四）では、兵士ポリュストラトスが瀕死のダレイオスを発見して水を飲ませ、

ダレイオスはギリシア語で感謝の言葉を口にしてから息絶えた。しかしダレイオスは通訳を使うのが通例だった。(クルテイウス五・一三・七)。ユステイヌス(一一・一五・五〜一三)では、彼を発見した一兵士がペルシア人捕虜をそばに連れて行き、ダレイオスはその捕虜に遺言を託した。

**三 王として埋葬した** アレクサンドロスはダレイオスの遺体をペルセポリスに送り、ペルシアの慣例に従って埋葬しよう命じた(アリアノス三・二二・一、ユステイヌス一・二五・一五)。プルタルコス(四三・七)は遺体が王母シシガンピスのもと、すなわちスーサへ送られたとするが、スーサに王墓は存在しない。

ペルセポリスの基壇から南へ約五〇〇メートルの丘の麓に、未完に終わったダレイオス三世の王墓がある。ほとんど石切り場同然で墓室もなく、ごく一部の浮彫が完成したにすぎない。シュミットは、ダレイオスの遺体はアルタクセルクセス二世の墓の地下室に埋葬されたと推測する。Schmidt, *Persepolis III*, p.107.

**四 ある者たちが書くところでは** アレクサンドロスがダレイオスと直接対面したとの伝承は、いわゆるアレクサンダー・ロマンに見出される。伝カリステネス『アレクサンドロス大王物語』(国文社)二・二〇。

**五 ラケダイモン人が：敗北を喫し** スパルタ王アギスが指導した反マケドニア蜂起、いわゆるアギス戦争。本巻六二・六〜六三・四から続く。

**五 評議会に委ねた** スパルタはコリントス同盟に参加していなかったにもかかわらず、スパルタの処置は同盟評議会に委ねられた。この理由をクルテイウス(六・一・一七〜一九)は、勝利の大きさが副官の手にする限度を越えており、アンティパトロスがアレクサンドロスの妬みを恐れたためであるとする。しかしアレクサンドロスはこの勝利を「鼠の喧嘩」と呼んで軽蔑したから(プルタルコス『アゲシラオス伝』一五・四)、彼がアンティパ

トロスを妬んだとは考えにくい。ただアンティパトロスが、自分の一存でスパルタを処分すれば、アレクサンドロスに不快感を与える危険があると考えたのは事実であろう。

**五 五〇人を人質に取り** 前三三〇年にアテネでアイスキネスが行なった弁論『クテシフォン弾劾』一三三は、アレクサンドロスのもとへ送られるはずのスパルタ人の人質五〇人が、（理由は不明だが）まだギリシアを出発していない事実に言及している。

**五 アジアに使節を派遣して** ダレイオスの死後、アレクサンドロスがカスピ海南岸のヒュルカニア地方を平定した際、ダレイオスのもとを訪れていたスパルタ使節四人を拘束した（アリアノス三・二四・四）。彼らはアギス戦争の遂行に関連してダレイオスに派遣されていた者であり、本節で言及された使節とはもちろん別。

スパルタ以外の反乱諸都市については、テゲアは首謀者以外は許され、アカイアとエリスはメガロポリス（マケドニア側に付いたため反乱軍に包囲されていた）に一二〇タラントンを支払うよう命じられた（クルティウス六・二・二〇）。

## 第七四章

**一 バルクサエントス** 正しくはバルサエントス

**二 大きな抛り所になるだろう** クルティウスは、ベッソスがダレイオスに対する陰謀を企てた根拠を次のように説明している。「この地方『バクトリア』は、兵器や兵員、土地の広さという点で、あの諸部族のどの地方にも引けを取らなかつた。アジアの三分の一を占め、兵役につくことのできる青年男子の数はダレイオスが失った軍

勢の数に匹敵していた。(中略)この地方を支配下に収めることができれば、覇権の力を再び得られるものと考えていたのである」(五・一〇・三、四、谷・上村訳)。ダレイオス臨席の幕僚会議におけるナバルザネスの発言にも、同様な言及がある(クルティウス五・九・五)。

**二 自身を王に任命した** アリアノス(三・二五・三)によると、ベッソスは「直立した王冠を戴き、ペルシア王の衣裳を身に着けて、ベッソスではなくアルトクセルクセスと名乗り、アジアの王を称し」た。クルティウス(六・六・一二)も、彼が「王の衣裳をまとい、自らをアルタクセルクセスと呼ぶよう命じ」と述べる。王の衣装については、本巻七七・五および訳註参照。アルトクセルクセス(またはアルタクセルクセス)という名前は、前四世紀にアケメネス朝の王名として襲名されていた。ダレイオス三世の前の王アルセス(在位、前三三八〜三三六年)がアルタクセルクセス四世を名乗った可能性があるので、その場合ベッソスはアルタクセルクセス五世となる。こうして彼はアケメネス朝の前例を踏襲し、王位の正統性を訴えたのである。アルセスの襲名については Bosworth, p.153,357.

**二 兵士たちを登録し** アリアノス(三・二五・三)によると、彼は「バクトリアまで逃走したペルシア人と多数のバクトリア人を周囲に集め、スキタイ人も同盟者として来援することを期待していた」。クルティウス(六・六・一三)では、彼は「スキタイ人やタナイス(現シル・ダリヤ)河畔の住民を集めつつあった」。

**三 遠征は終わったと思い** ダレイオス追撃の終了後、アレクサンドロスはバルティアの首都ヘカトンピュロス(本巻七五・一註参照)で後続部隊の到着を待った。集結した兵力は騎兵三〇〇〇、歩兵二万(プルタルコス四七・一)。ここで兵士たちの間に、王が遠征の成果に満足して帰国を決めたという根拠のない噂が飛び交った(ク



ルティウス六・二・一五、プルタルコス前引箇所)。ダレイオスの死去をもって、ペルシアに復讐するという公式の遠征目的は達せられたのだから、遠征そのものが終結したと將兵たちが判断しても不思議はない。なおアリアノスはヘカトンピュロスでの出来事には言及していない。

三 兵員会に召集し アレクサンドロスの演説は、クルティウス(六・三・二〜一八)とプルタルコス(四七・一〜二)が記録している。

三 彼らの士気を高めた 兵士たちは熱烈な歓呼の声で応え、どこへでも望みの所へ連れて行ってくれと叫んだ(クルティウス六・四・二、プルタルコス四七・三)。

三 部隊を解散した アリアノス(三・一九・五)では、除隊されたのはテッサリア騎兵部隊とギリシア同盟軍。遠征の当初の目的が達成された今、これ以上ギリシア同盟軍を伴う理由はない。彼らはダレイオス追撃には参加せず、エクバタナに留まっていた。アレクサンドロスはエクバタナに滞在中の副將バルメニオンに対して、ヘカトンピュロスからこの指示を発したのである。アリアノス(前引箇所)は誤ってこれをダレイオス追撃の開始前に置き、エクバタナに着いてからアレクサンドロスが除隊命令を出したと記述している。

三 各騎兵には一タラント、歩兵には一〇ムナ クルティウス(六・二・一七)も同じ数字を与えている。一〇ムナは六分の一タラント。

三 付け加えた アリアノス(三・一九・五)は、給料満額の上に二〇〇〇タラントンの褒美を付け加えたとする。ただしプルタルコス(四二・五)では、二〇〇〇タラントンが与えられたのはテッサリア騎兵のみ。アレクサンドロスは除隊した兵士の帰国のため陸路の護衛を付け、シリア沿岸からは無事に船でエウボイア島に着くよう必

要な指示を出した（アリアノス三・一九・六）。

**四 軍に留まることを選んだ者たち** 引き続き従軍を希望する者は傭兵として登録され、それは多数に上った（アリアノス三・一九・六）。エクバタナを出発した彼らは、アレクサンドロスがスシアからバクトラに向けて進発したところで本隊に追いついた（同三・二五・四）。このうちテッサリア人は、前三二九年、オクソス（現アム・ダリヤ）川を渡る前に最終的に除隊された（同三・二九・五）。

**五 一万三〇〇〇タラント** ユステイヌス（二・一・一）では、同額がマケドニア人兵士に分配され、金一万九〇〇〇タラントンがエクバタナに集められた。クルティウス（六・二・一〇）によると、戦利品の総額は二万六〇〇〇タラントン。そのうちマケドニア人兵士に一万二〇〇〇タラントンが分配されたが、これと同額が警備兵によって盗まれたという。

## 第七五章

**一 三日目にヘカトンタピュロス…の近くに宿営した** ヘカトンタピュロスは通常ヘカトンピュロスと呼ばれ、今日の *Ahahr-i-Qumis*（ダムガンの南西三二キロ）に比定されている。カスピ海沿岸諸州と中央アジアを結ぶ交通の要衝で、後にセレウコス一世が旧都市（名称不明）を拡張し改名した。アレクサンドロスの道程記には遠征の折り返し点として記録され、後にパルティア王国の首都となった（プリニウス『博物誌』六・四四〜四五）。

アレクサンドロスはヘカトンピュロスで軍を再結集してからヒュルカニアへ向けて出発したので、三日目にこの都市の近くに宿営したはずがない。ディオドロスはヘカトンピュロス進発からヒュルカニア侵攻までを極度に

圧縮して記述したため、地理的關係に混乱をきたしている。

二 **それから一五〇スタディオンの進み** クルティウス（六・四・三）も同じ距離を与えているが、これはアレクサンドロス本隊のことで、他の二隊は別の道を進んだ。本章三註参照。

二 **ステイポイテスと呼ばれる大きな川** クルティウス（六・四・四、五、六）はこれをジオベディス川と呼んで同様に記述し、それが再び地表に現れた後はリグダノス川に合流すると述べている。前者はエルブルズ山中の Dorudar 川、後者はエルブルズ北麓を西に流れてカスピ海に注ぐネカ川に比定されている。Atkinson, p.182.

三 **ヒュルカニア地方に侵入し** ヒュルカニアはカヴィール砂漠とカスピ海に挟まれた東西に細長い地域で、南側にはエルブルズ山脈が走る。アレクサンドロスがヒュルカニアに侵攻したのは、この地方へ逃げ込んだギリシア人傭兵部隊を制圧する（アリアノス三・二二・一）と同時に、さらに東方へ進むにあたって背後の安全を確保するためであった。侵攻にあたって彼は軍を三隊に分け、クラテロス隊を山脈東部の山岳民族であるタプロイ人の征服に向かわせ、エリギュイオスには車両部隊と役畜群を率いて平坦な道を進ませた。彼自身は本隊を率い、最短だが困難な道を進んだ（同三・二二・二、三）

三 **すべての都市を服属させた** ヒュルカニア最大の都市はザドラカルタで、ここにヒュルカニアの王宮があった（アリアノス三・二五・一）。クルティウス（六・五・二）はここにダレイオスの王宮があると述べている。現グルガン／アスタラバードまたは現サリーに比定されており、後者の説が有力。クラテロスとエリギュイオスの部隊はいずれもここで本隊に合流した（アリアノス三・二三・六）。ストラボン（一一・七・二、五〇・八C）は、タラブラケ、サマリアネ、カルタ、王都タペを列挙。クルティウス（六・四・二三）はまたアルワイの町に言及し、

ここでクラテロスとエリギュイオスが合流したとする。この町については不祥。 Atkinson, p.190.

三 一部の人々はヒュルカニア海と呼んでいる クルティウス(六・四・一八)とプルタルコス(四四・二)も、カスピ海とヒュルカニア海の二つの呼び名を併記している。

四 「幸福」と呼ばれる村々 具体的な地名は不祥だが、ヒュルカニア地方の豊かさは有名であった。ストラボンは、「ヒュルカニア地方は地味がいたって豊かで広く、大部分が平野で名高い諸都市がこれを分けあっている」(二一・七・二、五〇八C、飯尾都人訳)と述べる。クルティウスも「その地方はさまざまな産物に恵まれていたが、異常に大きい林檎を産するほか、葡萄の実りもきわめて豊かであった」(六・四・二二、谷・上村訳)と言う。

五 一メトロンの葡萄酒 ストラボンでも同じ数字(一一・七・二、五〇八C)。

六 一〇メデムノスの乾燥無花果 ストラボンでは六〇メデムノス(前引箇所)。

七 蜜が滴り落ちる 「樗によく似た木が多く、その葉には多くの蜜がついている。ただし、日の出より早起きしないと、樹液はわずかな熱でも消失してしまう」(クルティウス六・四・二二、谷・上村訳)。

八 アントレドン 野生の蜜蜂のこと。「蜜蜂は樹々に群がり、蜂蜜が葉から流れ落ちる」(ストラボン前引箇所)。一九世紀初頭エルブルズ山中の孤立した村々では、蜜蜂の飼育以外に生業がなかったという。E.Herzfeld, *The Persian Empire*, 1968, p.14.

## 第七十六章

一 隣接する諸民族 大王伝に現れるのはタプロイ人とマルドイ人。後者については本章三〜八および訳註参照。

タプロイ人は「盗賊を生業とする部族」の一つに数えられるが（ストラボン一・一三・三、五二三C）、ガウガメラの会戦には騎兵としてヒュルカニア人・パルティア人と共に参戦した（アリアノス三・八・四、一一・四）。彼らの居住地をストラボン（一一・八・八、五一四C）はヒュルカニアとアレイアの間においているが、エリギュイオス率いる別動隊が彼らの制圧のため派遣された（アリアノス三・二三・二）ことからして、カスピ海南岸でエルブルズ山脈東部の北麓一帯であろう。エリギュイオスは彼らを服属させ、タプロイ人の総督アウトプラダテスを連行した（クルティウス六・四・二四）。彼の総督領は、属州パルティア／ヒュルカニア領の下位の区分をなしており、アレクサンドロスは彼に総督領を返還した上、マルドイ人征服後はマルドイ人の総督をも兼任させた（クルティウス六・四・二五、アリアノス三・二三・七、二四・三）。なおクルティウスはアウトプラダテスの名前をプラダテスとしているが、ここでは *Heckel, Who's Who in the Age of Alexander the Great, p.65* に従う。アリアノスでは両方の名前が混在。

一 **指揮官たちの多くが自ら投降した** ペルシア人高官たちの投降についてはクルティウスとアリアノスが記述しているが、多くの食い違いがあり、その場所と時期の特定は難しい。ここでは主要人物を列挙するに留める。

①千人隊長ナバルザネスは大王に書簡を送り、ダレイオス三世に対する反逆について弁明した上で、投降する際の通行の安全を求めた。アレクサンドロスが安全を保証したところ、大王のマルドイ人制圧後、彼は首都ザドラカルタに現れて投降した（クルティウス六・四・八〜一四、五・二二〜二三、アリアノス三・二三・四）。

②属州パルティア／ヒュルカニア総督のプラタペルネスは、他の高位のペルシア人と共に投降した（クルティウス六・四・二三、アリアノス三・二三・四）。その後彼は総督領を返還され（アリアノス三・二八・二）、大王の死後も

ヒュルカニア総督の地位に留まった（ディオドロス一八・三・三）。

③ 最高位の貴族アルタバゾスは、息子たちやダレイオスの側近たちと共にザドラカルタで投降した（クルティウス六・五・一〜五、アリアノス三・二三・七）。アルタバゾスの父は属州ヘレスポントス／フリュギアの総督パルナバゾス、母は王族のアパメで、彼の家系はペルシアでも屈指の名門。ダレイオス三世の忠実な廷臣だったが、ベッソスの陰謀を阻止することができず、陣営から離脱していた。投降には九人の息子を伴ったとされるが（クルティウス六・五・四）、名前が伝わるのは三人のみ（アリアノス前引箇所）。彼の娘バルシネはイツソス会戦後に大王の愛人となっており、アレクサンドロスは彼らを厚遇した。その後アルタバゾスはバクトリア総督に任命されたが（アリアノス三・二九・一）、その一年後に高齢を理由に引退した（アリアノス四・一七・三、クルティウス八一・一九）。

二 **ギリシア人約一五〇〇人** クルティウス（六・五・一〇）とアリアノス（三・二三・九）も同じ数字を与える。彼らはアルタバゾスの仲介で投降したが、アレクサンドロスはこのうちコリントス同盟の決議以前からペルシアに仕えていた傭兵は釈放し、決議以後に仕官した者はそれまでと同額の給与で軍に加えた（アリアノス三・二四・五）。

三 **マルドイ人** カスピ海の南岸、エルブルズ山脈の山間部から北麓平野部にかけて居住していた民族で、略奪を生業としていた（ストラボン一・二三・六、C五二四、クルティウス六・五・一一）。彼らの抵抗は巧妙で、土地の自然条件を生かした上に、樹木の枝葉を絡み合わせて垣根を作り、密林の隠れ家から奇襲攻撃をかけるなどしてマケドニア軍を苦しめた。その平定には五日を要した（クルティウス六・五・一三〜一七、二二）。

五 最良の一頭を盗んでいった アレクサンドロスの愛馬ブーケファラス。彼がこの馬を手に入れたいきさつは、少年時代のアレクサンドロスの最も有名な逸話である（プルタルコス六）。アリアノス（五・一九・六）はこの出来事を、ザグロス山中のウクシオイ人に対する遠征中のこととしているが、これは誤り。

六 デマラトス コリントスの政治家（前四〇〇年頃～前三二八年）。親マケドニア派の指導者で、フィリッポス二世の賓客（デモステネス一八・二九五）。フィリッポスとクレオパトラの結婚が原因でアレクサンドロスが出国した時、父子を和解させた（プルタルコス九・二二～二四）。朋友の一人として東方遠征に従軍し、グラニコスの会戦では王のすぐ傍で戦う（アリアノス一・一五・六）。玉座についたアレクサンドロスを見て、涙を流して喜んだ（プルタルコス三七・七、五六・二）インド侵攻の少し前に老衰のため死去（同五六・二）。

## 第七七章

一 アマゾン族 ギリシア神話において女性戦士だけからなる民族。黒海東岸からコーカサス、スキタイにかけての地域に住むと考えられた。女王をいただいて狩猟と戦争に従事し、弓を引くときの邪魔にならないよう右の乳房を切断していた。征服したり捕虜にした男を奴隷とし、彼らとの間に生まれた子どもは女兒のみを育て、男児は殺すか身体に障害を与えたといわれる。大牟田訳註二〇六三～二〇六七頁。

一 タレストリス 女王の来訪については、クルティウス（六・五・二四～三二）とユステイヌス（一二・三・五～七）も同様に伝えており、女性戦士の人数は三〇〇人、女王の滞在期間は一三日で一致する。共通の典拠はクレイタルコスであると考えられる。プルタルコス（四六・一～二）は、これを事実として伝える作家と作り話とす

る作家の名前をそれぞれ列挙した上で、事実ではないと述べ、ストラボン（二一・五・四、五〇五C）もその史実性を否定している。

アマゾン族の存在自体が創作であるにしても、女王来訪の逸話の元となった出来事として、次の二つを挙げることができる。

①前三二八年初め、ヨーロッパ系スキタイ人の使節がアレクサンドロスの冬营地バクトラを訪れ、新しく即位した王が彼に娘を与えたいと希望していることを告げた。アレクサンドロスはこのことを丁重に断った（アリアノス四・二五・一〜六、クルティウス八・一七〜一〇、プルタルコス四六・三二）。

②前三二四年、オピスからエクバタナへ向かう途中、メディア総督アトロパテスはアマゾン族だと称して一〇〇人の女性をアレクサンドロスに贈った（アリアノス七・一三二〜一三六）。

PPedech, *Historiens Compagnons d'Alexandre*, Paris, 1984, pp. 88-89 は、この逸話がアレクサンドロスによる東方様式採用の文脈に置かれていることに注目し、アマゾン女王との結合は征服者たるアレクサンドロスが異民族への接近政策を開始したことを告げ、後の正妃ロクサネやペルシア王族との結婚へと論理的につながるものだと述べている。

**四 取次ぎ役** 後にクレイトスはアレクサンドロスに刺殺された宴会で、王に対する不満の一つに、王に会うのにペルシア人に請願しなければいけないことを挙げた（プルタルコス五一・二二）。

**四 オクサトレス** ダレイオス三世の弟で、イツソスの会戦では王を守って奮闘した（本巻三四・二〜三）。ダレイオスの死後、一〇〇〇人の貴族と共に捕虜となり（クルティウス六・二・九）、後にアレクサンドロスの朋友に



取立てられた（プルタルコス四三・七、クルティウス六・二・一一）。本文にある護衛兵とは、正しくはヘタイロイ  
＝朋友であろう。

**五 ペルシアの王冠**：・王冠はティアアラと呼ばれるフェルト製の帽子。柔らかいティアアラはペルシア人一般も  
着用したが、硬く直立したティアアラは王だけが用いた。

ペルシア王の衣装については二つの記述がある。クセノフォン『キュロスの教育』（八・三・一三〜一四）によ  
ると、戦車に乗って登場したキュロス二世は、まっすぐな頭飾り（ティアアラ）、赤紫の地に白い縞模様の下着  
（キトン）、緋色のズボン（アナクシュリデス）、深紅色の上着（カンデュス）を身に付け、頭にはディアデーマ  
を巻いていた。またクルティウス（三・三・一七〜一九）によると、バビロンを進発したダレイオス三世は、銀を  
縫いこんだ紫のトウニを着て、黄金の帯をつけ、頭飾り（キダリス）を白い線が入った青いリボンで結んでい  
た。

**五 ズボンと長袖上着以外のペルシア風装身具を身に付けた** ズボン（アナクシュリデス）はゆったりした形の  
乗馬用ズボン、袖付き上着（カンデュス）は羊毛製で長く広い幅の袖が付いている。プルタルコス（四五・二）  
は、「メディア風の衣装はあまりに蛮族風で奇抜だったので採用せず、ズボンも長袖付きの上着も頭飾りも着用  
しなかった。その代わり、ペルシア風とメディア風の間をとってうまく混ぜ合わせ、メディア風より慎ましい  
がペルシア風よりは派手なスタイルを作った」と述べる。アテナイオス（一二、五三七e）によると、日常生活  
でアレクサンドロスは、白い縞の肌着（キトン）と紫の外套（クラミュス）を着け、王の印のリボン（ディアデ  
ーマ）を巻いた帽子（カウシア）を被った。すなわち彼はペルシア風の頭飾り（ティアアラ）は採用せず、その代

わりマケドニア風の帽子（カウシア）にペルシア風のリボン（ディアデーマ）を巻いた。以上からアレクサンドロスが採用したのは、頭に巻くリボン（ディアデーマ）とペルシア風のベルトであることがわかる。

**五 朋友たちにも：分け与え** ユステイヌス（二・三・九）は、王が朋友たちにも「金で縫い取りした紫の長い衣服を着るよう命じた」と述べており、アレクサンドロス自身も長袖の肌着を着ていた可能性がある。ちなみにシドン出土の「アレクサンドロスの石棺」（イスタンブール考古学博物館蔵）に彫られた戦闘中の王は、長袖のキトンを着てバックル付のベルトを締めている。

**六 愛妾たち** その人数は史料によって若干の相違がある。クルティウスは三六〇人（三・三・二四）または三六五人（六・六・八）、プルタルコス『アルタクセルクセス伝』（二七・二）は三六〇人、ギリシア人の歴史家デインでは三〇〇人（アテナイオス一二、五一四b）、デイカイアルコスでは三六〇人（同一三、五五七b）。

**七 王の寝台の周りを歩く** 彼女たちは音楽の演奏もしていた。クマイのヘラクレイデスは次のように述べている。「三〇〇人の女性が王をとりまいている。彼女たちは夜起きていられるように、昼に眠る。夜になると彼女らは、ランプが灯っているかぎりには歌いつづけ、豎琴を弾きつづける。王は彼女らを側室にもしていた」（アテナイオス一二、五一四b、柳沼重剛訳）。イツソスの会戦後にダマスコスで捕虜になったのは、こうした女性たちであったのかもしれない。パルメニオンはダマスコスからアレクサンドロスに宛てた手紙の中で、「王のために音楽を奏する遊女」三二九人を捕虜のリストに含めている（アテナイオス一三、六〇八a）。

## 第七八章

一 **彼らの機嫌をとった** アレクサンドロスの東方化に対する將兵の不满については、プルタルコス（四五・四）、ユスティヌス（一二・四・一）、クルティウス（六・六・九〜一〇）も言及する。贈り物による懐柔策はクルティウス（六・六・一一）が記述している。

二 **サティバルザネスが…兵士たちを殺害し** 彼がダレイオス三世に対する陰謀に参加したことについては、本巻七三・二註参照。アレクサンドロスがヒュルカニアからアレイア州に進んだ時、サティバルザネスはスシアの町（現トウース）で王を出迎えた。アレクサンドロスは彼の総督領を安堵した上、朋友のアナクシッポスと約四〇騎の騎馬投槍兵を同行させた（アリアノス三・二五・一〜二）。サティバルザネスがこれらの兵を殺害し、反乱を起こしたとの報せが届いたのは、アレクサンドロスがバクトリアへ向かう途中であった（同三・二五・五、クルティウス六・六・二〇）。

一 **彼に向かって出撃した** アレクサンドロスはベッソスより先にサティバルザネスの反乱に対処すべく、ヘタイロイ騎兵隊と騎馬投槍兵、弓兵、アグリアネス人部隊、および歩兵二個部隊を率いて急行し、六〇〇スタディオ（約一一〇キロ）の道を二日で駆け抜けた（アリアノス三・二五・六）。

一 **アルタコアナ** アレイア州の首都。コルタカナ、アルタアエナ、アルタカナとも呼ばれる。現在のヘラートに比定する説もあるが、明確ではない。詳細は大牟田訳註一六五五頁。

三 **険阻で大きな岩砦** この岩山の包囲戦はクルティウス（六・六・二三〜三二）が詳しく描写している。周囲は三二スタディオ（約六キロ）あって樹木と水に恵まれ、頂上は草原で、一万三〇〇〇人が武装して立てこもつ

た。王は包囲をクラテロスに委ねてサティバルザネスを追跡したが、彼があまりに遠くに逃げたので引き返した。包囲戦は岩と崖に阻まれたが、おりからの強烈な日光と強い西風で木材が自然発火したのを利用し、火炎と煙で攻めたてて陥落させた。

**四 諸都市を三〇日で平定し** 首都アルタカナでは攻城塔を繰り出して反乱者を降伏に追い込んだ（クルティウス六・六・三三〜三四）。アリアノス（三・二五・七）はこの間の経過をきわめて簡略に記述しているが、大規模な包囲戦と三〇日に及ぶ戦闘期間から、住民の反乱が属州全体に及んでいたことがうかがえる。またクラテロスの役割が大きかったことも、クルティウスから明らかである。アレクサンドロスは新しいアレイア総督にペルシア人アルサケスを任命した（アリアノス前引箇所）。

**四 ドランギアナの首都** ドランギアナはザランガイアとも呼ばれる。ハームーン湖を中心とするアフガニスタン西部。首都は、通説ではアフガニスタン西部のファラーに比定されるが、異論もある。詳しくは大牟田訳註一六五〜八頁。総督のバルサエンテスはダレイオス三世殺害者の一人で、インドに逃亡したが、後に捕えられて処刑された（アリアノス三・二五・八、クルティウス六・六・三六）。

## 第七九章

**一 恐ろしい事件** 前三三〇年秋、ドランギアナ地方の首都フラダで起きた、いわゆるフィロータス事件。都市の名前は、事件の後にプロフタシア（予見）と改められた。フィロータス事件に関する記述は、アリアノス三・二六、クルティウス六・七〜一一、プルタルコス四九・一〜一三、ユスティヌス一二・五・二〜三。事件の政治的意

味については森谷『征服と神話』一九〇〜一九三頁、大牟田訳註一六五九〜一六六六頁。

一 **ディムノス** クルティウス（六・七・二）ではデュムノス。プルタルコス（四九・三）の写本のリムノスは明らかに誤記。プルタルコス（前引箇所）によると、彼の出身はアクシオス川の河口に近いマケドニアの町カライストラ。ディオドロスは彼を「朋友の一人」としているが、家柄も地位も不明。クルティウス（前引箇所）は「権威も王の寵愛も取るに足りなかった」としている。

一 **あることが原因で** 彼が陰謀を企てた原因は不明。

二 **ニコマコス** 出自も地位も不詳。プルタルコス（四九・四）とクルティウス（六・七・七）では、彼は陰謀には加担しなかった。

二 **兄弟のケバリノス** 出自も地位も不詳。

三 **フィロータスに会い** フィロータスはマケドニア騎兵部隊の指揮官で、王の最高位の側近。毎日二度アレクサンドロスの天幕を訪ねる習慣だった（アリアノス三・二六・二）。

四 **王の近習の一人** 武器庫管理官のメトロン（クルティウス六・七・二二）。

五 **入浴中の王のもと** アレクサンドロスは夕方に入浴する習慣だった（プルタルコス二三・五）。

六 **ディムノスは自ら命を絶った** クルティウス（六・七・二九〜三〇）では、彼は王から呼び出しを受けると剣で体を傷つけたが、兵士に取り押さえられてアレクサンドロスの天幕に運ばれ、声を発することなく王の前で絶命した。プルタルコス（四九・七）では、逮捕される際に抵抗したため兵士に殺害された。

六 **陰謀への関与は否認した** 王の天幕に呼ばれたフィロータスはまったく動揺せず、取るに足らない者の言う

ことなど信用しなかったと釈明した（クルティウス六・七・三三）。

**六 決定をマケドニア人に委ねた** クルティウス（六・八・一〜一五）では、アレクサンドロスはまずフィロータスを除く側近たちの会議を招集し、ニコマコスに証言させた上で、裁判を開くことを決定した。プルタルコス（四九・八）が、王は「以前から彼「フィロータス」を憎んでいた者たちを集めた」と述べているのも、同じ会議のことであろう。クルティウス（前引箇所）によると、会議ではフィロータスと対立関係にあったクラテロスが議論をリードし、彼を排除する絶好の機会として利用した。プルタルコス（四八）では、かねてからフィロータスは傲慢な言動が目立ち、周囲の反感を買っていた。クラテロスはフィロータスの愛人を秘かに王のもとへ連れて行き、フィロータスの傲慢な物言いを通報させた。こうして側近たちの間に反フィロータス派が形成された。

## 第八〇章

**一 死刑判決を下した** 裁判には武装した六〇〇〇人の兵士が集まった（クルティウス六・八・二三）。重罪事件ではマケドニア古来の慣習に従って王が取り調べ、軍が（平時には大衆が）判決を下した（同六・八・二五）。クルティウスは裁判におけるアレクサンドロスの告発とフィロータスの弁明を長々と記述しているが、信憑性は疑わしい。

**一 パルメニオンも含まれていた** パルメニオンに判決が下されたことは、どの史料も言及していない。これはディオドロスの誤解であろう。

**二 拷問を受けて** クルティウス（六・一一・九〜三五）によると、裁判のあとアレクサンドロスは再度側近たち

を招集し、フィロータスを拷問して真相を究明することを決めた。拷問は夜間に行なわれ、翌日の裁判でフィロータスは自白の内容を認めた。プルタルコス（四九・一一〜一二）も拷問に言及している。

**二 処刑された** アリアノス（三・二六・三）では投槍で、クルティウス（六・一一・三八）では石打ちで処刑された。フィロータス以外に処刑されたのは、ディムノスが最初にニコマコスに打ち明けた八人、側近護衛官のデメトリオス、それに裁判中に陰謀参加を認めたカリスの計一〇人であった（クルティウス六・七・二五、一一・三五〜三七）。

**二 リュンケステイス出身のアレクサンドロス** 本巻三二・一〜二および訳註参照。上部マケドニアのリュンケステイス王国の旧王族出身。彼の二人の兄弟はフィリップス二世暗殺事件に連座して処刑されたが、彼だけは即位したアレクサンドロスに逸早く忠誠を誓ったために許された。ところが前三三三年、ダレイオス三世が彼に王暗殺を促す手紙がパルメニオンによって押収された。これがきっかけで彼は逮捕され、監視下に置かれた（アリアノス一・二五）。

**二 アンティパトロスとの縁戚関係** 彼の妻はアンティパトロスの娘であった。

**二 一言も発することなく** クルティウス（七・二・八〜九）によると、彼は弁明を命じられたものの怖気づき、準備していたことのごく一部しか述べられず、これが罪の意識の現われと見なされた。彼はその場で槍によって刺し殺された。

**三 パルメニオンを謀殺した** 関連史料はアリアノス三・二六・三〜四、クルティウス七・二・一一〜三四、プルタルコス四九・二三。森谷『征服と神話』一九四〜一九五頁、大牟田訳註一六六六〜一六六九頁。アレクサンドロ

スはバルメニオンの友人であるポリュダマスに密命を与え、バルメニオン宛の手紙を与えて送り出した。ポリュダマスが暗殺を実行すると将兵が騒ぎを起こしたが、彼は王の命令書を見せてこれを鎮めた。

四 「無規律部隊」 クルティウス（七・二・三五〜三八）とユスティヌス（一一・五・四〜八）も将兵の隔離に言及しているが、「無規律部隊」という名称は出てこない。

## 第八章

一 アリアスパイ人 ヘルマンド川下流域に住んでいた民族で、アリアスパイ人とも呼ばれる。以下の逸話はアリアノス（三・二七・四〜五）とクルティウス（七・三・一）にも言及されている。

一 キュロス ペルシア人をメディア人の支配から独立させたキュロス二世。アリアノス（前引箇所）によると彼はスキタイ遠征に際してアリアスパイ人に助けられたという。

一 「善行者たち」 ギリシア語で *euergetes*、ギリシア諸市が顕著な功績のあった外国人に贈る称号であるが、ペルシアにも同じ慣行があった。たとえばサラミスの海戦でギリシア船を捕獲したピュロコスは、「王の恩人としてその名を記帳され莫大な領土を与えられた」（ヘロドトス八・八五、松平千秋訳）。

二 この民族を称えた アリアノス（前引箇所）によると、アレクサンドロスは彼らを自由の民として認め、隣接する土地で彼らが望むだけの土地を領土に加えた。大牟田訳註一六七頁は、こうした寛大な処置はキュロスの故事に名を借りながら、実際には糧秣提供や後方安全の保証に対する報償であったと推測する。

二 ケドロシア人 ガドロシア人あるいはゲドロシア人とも呼ばれる。ペルシア湾沿岸にまでいたるイラン高原



の広い範囲に住んでいた。アケメネス朝時代には属州アラコシアに含まれた。

**二 ティリダテス** ペルセポリスの財務官（本巻六九・一）と同一視する解釈もあるが、Heckel, op. cit. p.268はこれを否定し、別のペルシア人または地元出身者と見なす。一方クルティウス（七・三・四）は、かつてダレイオス三世の書記官であったアメディネスという人物が総督に任命されたとする。

**三 サティバルザネスが：アレリアに戻り** 彼はベッソスから得た二〇〇〇騎を率いていた（アリアノス三・二八・二）。

**三 エリギュイオスとスタサノルを：派遣した** アリアノス（前引箇所）では、派遣された指揮官はエリギュイオスとカラノスで、パルティア総督プラタペルネスがこれに協力するよう命じられた。クルティウス（七・三・二）では、エリギュイオスとカラノスに加えてアルタバゾスとアンドロニコスが派遣され、軍勢はギリシア人歩兵六〇〇〇と騎兵六〇〇〇だった。ここに指揮官としてスタサノルを挙げたのは、ディオドロスの誤解。

スタサノルはソロイ出身のキプロス人（ストラボン一四・六・三、六八三C）。前三二九年オクソス川渡河の際、アレクサンドロスによってアレイア総督アルサケスを逮捕すべく派遣され、彼自身が代わりに総督に任命された（アリアノス三・二九・五）。エリギュイオスはミュティレネ出身のギリシア人で、マケドニアに帰化してアレクサンドロスの朋友となった。イツソスとガウガメラの会戦ではギリシア同盟軍の騎兵部隊を指揮した（本巻一七・四、五七・三）。カラノスはマケドニア人で、前三二二年エジプトに残留するバラクロスに代わってギリシア同盟軍の歩兵部隊指揮官に任ぜられた（アリアノス三・五・六）。アルタバゾスはペルシア王家につながる名門貴族で、ダレイオスの死後アレクサンドロスに投降した（本巻七六・一註参照）。アンドロニコスはヒュルカニアにおいて、

ダレイオスに仕えていたギリシア人傭兵一五〇〇人を王のもとへ案内すべくアルタバゾスと共に派遣され、投降後に編入されたギリシア人の指揮官に任命された（アリアノス三・二三・九、二四・五）。

三 アラコシア地方 ドランギアナ地方の東で、ヘルマンド川流域を中心としたアフガニスタン南東部。総督にはメノンが任命され、駐留軍として歩兵四〇〇〇と騎兵六〇〇が残された（クルティウス七・三・五）。駐留軍の規模の大きさは、イラン東部からアフガニスタン南部にかけての広い範囲でメノンが上級監督権を有していたことを示唆する。彼は前三二五年に病死するまでその任に留まった。

## 第八二章

一 パロパニサダイ ヒンドウークシユ山脈の南麓に住む民族。パラパミサダイ、パラパニサダイとも呼ばれる。

五 土地全体が人を寄せつけず、近づき難い 以上の記述はクルティウス（七・三・七く一一）とほぼ一致する。

六 あらゆる障害 「軍は、この地で人間の文化一切から隔絶した状態に置かれ、被りうるかぎりのありとあらゆる艱難辛苦——物資の欠乏、寒さ、疲労、絶望に直面した」（クルティウス七・三・一二、谷・上村訳）。クルティウス（七・三・一三く一八）にはより詳しい記述がある。アレクサンドロスが山脈を越えたのは、前三二九年初頭の厳冬期。なぜ真冬の豪雪季に困難な進軍を敢行したのか。大牟田訳註一六七六頁は、当初はドランギアナの穀倉地帯で越冬する予定であったが、フィロータス事件が遠征軍に大きな動揺を引き起こしアレクサンドロス批判も広がったので、これを抑えるために進軍を命じたと推測している。

七 視力を失った *ten horasin*（視力を）の語は写本になく、校訂者の補いである。

### 第八三章

一 **パロバニソス山** ヒンドウークシユ山脈のこと。イラン人はこの山を、鳥も越えられないほど高い山脈と見なしていた。遠征に同行したアリストプロスも、「アジアのどんな山より高い」と述べている（アリアノス三・二八・五）

一 **一六日かけて横断し** クルティウス（七・三・二二）では一七日、ストラボン（一五・二・一〇、C七二五）では一五日。

一 **インド** 写本では *ten Meitken* すなわちメディア。校訂者によって「インド」と訂正された。

一 **都市を建設して** コーカサスのアレクサンドリアとして知られる。アリアノス（三・二八・四）とクルティウス（七・三・二三）もこれに言及する。正確な位置は確定していないが、一般にはカブルから北へ約六〇キロのベグラムに比定されている。これに対して *Goukowsky, p.237* は、この都市はコーカサス越えの後に建設されたもので、コーカサスのアレクサンドリアでは別であるとして、現在のテルメズに比定する。

一 **プロメテウス** ギリシア神話における巨人族の一人。ゼウスから火を盗んで人間に与え、その罰としてコーカサスの山に鎖でつながれ、毎日鷲に肝臓を食べられた。肝臓は毎晩元通りになったので、彼の苦痛は絶えることがなかった。アイスキュロス『縛られたプロメテウス』参照。クルティウス（七・三・二二）も同じ大きさの岩とプロメテウス伝説に言及している。ヘレニズム時代の地理学者エラトステネスは、この伝説を大王に迎合するために創作されたものと見なした（ストラボン一・五・五、五〇五C、アリアノス五・三・一〜四）。

二 別の諸都市を建設し トイブナー版とロエプ版は写本Rに従って複数形で「別の諸都市」*alias poleis*と読むが、ビュデ版は写本Fに拠って単数形で *alien poin* とする。いずれを採用するにしても、前節で言及されたコーカサスのアレクサンドリアから一日行程という近接した地点に、わざわざ別のアレクサンドリアが建設されたとは考えにくい。多くの学者は両者を一つの都市と見なす。この場合第二節の記述は、第一節の補足説明と考えられる。P.M.Fraser, *Cities of Alexander the Great*, Oxford, 1996, p.146 は、第二節のアレクサンドリアを *subsidiary foundations* と呼んでいる。一つの都市が複数の居住区域を持っていたと考えるのが適切であろう。

二 バルバロイ七〇〇〇人：… クルティウス（七・三・二三）では、マケドニア人の古参兵七〇〇〇人と、軍役を解かれた兵士たちが入植した。ディオドロスが傭兵にのみ「希望者」と記述していることは、バルバロイと非戦闘員の入植に強制的な要素があったことを示唆する。

三 バクトリアへ進軍した アレクサンドロスは前三二九年春にヒンドウークシュ北麓の都市バクトラ（現バルフ）を進発し、オクソス（アム・ダリヤ）川へ向った。その間は四〇〇スタディオン（七二キロ）にわたって一滴の水もない砂漠が広がり、将兵は炎熱と渇きに苦しみ、倒れた兵士の数は戦闘による死者よりも多かったという（クルティウス七・五・二〜二五）。

六 エリギュイオスが勝利した 二人の一騎打ちの場面は、クルティウス（七・四・三三〜三七）が詳しく述べている。二人とも兜を脱いで戦い、エリギュイオスはサティバルザネスが先に放った槍をかわした後、相手の喉の真ん中を長槍で貫いた。クセノフォン『アナバシス』（一・八・六）によると、ペルシアの将軍は重大な状況下では兜を被らずに戦った。この勝利の知らせがアレクサンドロスに届いたのは、彼のバクトリア進出後のことだが、

アリアノス（三・二八・三）は將軍たちの派遣と合わせて一気に記述している。

**七 自身を王と宣言し** 王位の宣言については本巻七四・二および訳註参照。ベッソスは配下のペルシア人や七

〇〇〇人のバクトリア人を率いてヒンドウークシユ山麓一帯を荒らし、マケドニア軍を補給難に追い込んで前進を阻止しようとした。しかしそれでもアレクサンドロスが前進してきたので、オクソス川を渡り、ソグディアナ地方の首都ナウタカへと後退した。するとバクトリア騎兵たちはベッソスを見限って四散した（アリアノス三・二八・八〜一〇、クルティウス七・四・二〇）。

**七 饗宴に招いた** この作戦会議はクルティウス（七・四・一〜一九）に詳しい。ここでベッソスはソグディアナへの撤退を提案した。彼がバクトリアを放棄した最大の理由は、サティバルザネスによるアレイア蜂起が失敗に終わり、アレクサンドロスを挟撃するという作戦構想が崩れたことにある（大牟田訳註一六八二頁）。

**七 バゴダロス** クルティウス（七・四・八）ではコバレス。彼はベッソスに、アレクサンドロスに降伏して王位を与えてもらう方が好ましいと進言し、ベッソスを激昂させた。

**八 主だった指揮官たちが共謀して：：連行した** ベッソスを捕縛してアレクサンドロスに引き渡したのは、スピタメネスとダタペルネス、およびカタネス（アリアノス三・二九・六〜三〇・五、クルティウス七・五・二一〜二六。ただしカタネスに言及するのはクルティウスのみ）。アリアノスによれば、二人の首謀者はアレクサンドロスに使者を送り、ベッソスの連行と自分たちの帰順を告げて事前交渉を行なった。そこでアレクサンドロスはベッソスの身柄受け渡しのためプトレマイオスを派遣した。プトレマイオスとはある村を騎兵で包囲し、そこに残されていたベッソスを捕えたという。しかしプトレマイオスの役割は明らかに誇張されている。すでに事前交渉

が成立した以上、プトレマイオスの任務はベッソスの身柄を受け取ることでしかなかったはずである。アリアノス(三・三〇・五)がアリストプロスの記述として伝えているように、スピタメネスとダタペルネスの二人がベッソスをプトレマイオスのもとに連行し、それからアレクサンドロスに引き渡したとするのが正しい。大牟田註一六八八〜一六九一頁。

**九 立派な贈り物** ベッソスを連行してきた者全員に褒美が与えられた(クルティウス七・五・四三)。

**九 処罰のため：引き渡した** アリアノスによると、アレクサンドロスはベッソスを鞭で打ってからバクトラへ送った(三・三〇・五)。次いで前三二九／八年冬、会議を開いてベッソスの大逆行為を弾劾し、鼻と両耳を削ぎ落としてからエクバタナに送り、メディア人とペルシア人の集会で処刑するよう命じた(四・七・三)。一方クルティウスでは、アレクサンドロスはダレイオス三世の弟オクサトレスにベッソスを引き渡し、彼を見張らせながら、ダレイオス殺害の現場で殺させるために処刑を延期した(七・五・四〇、四三)。その後バクトラへ戻ってから、ベッソスをエクバタナに送致するよう命じた(七・一〇・一〇)。

**九 体を小さく切り刻み** 処刑の方法は、プルタルコス(四三・六)では四肢分断、クルティウス(七・五・四〇)では磔刑。実際にはペルシア風の槍による処刑だったと思われる。